
Si vis amari, ama

春桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i v i s a m a r i , a m a

【Zコード】

N2120R

【作者名】

春桜

【あらすじ】

薄桜学園に目出度く入学した雪村千鶴。期待と不安に胸を膨らませながらの入学式。その入学式に出席していた少年に千鶴は何故か無意識に話しかける。これが彼女の高校生活の始まり。明るくも儚い青春の物語です。

設定（読んだ方がいいです）（前書き）

とこり」とで始まります。

登場人物は結構紹介はぶくので読んでくださると嬉しいです。
更新遅いですがよろしくお願ひします。

設定（読んだ方がいいです）

（舞台）

私立薄桜学園。

頭はそこそこいい。中の上くらい。

学校も綺麗なレンガ造り？みたいなの。清潔感がいっぱい。
スポーツが一番有名で、剣道が強い。ほかにもサッカーや野球も強
い。

（登場人物）

雪村千鶴

ゆきむらちづる

- ・本作の主人公。明るく、勉強熱心な華の高校一年生。
- ・平助とは幼馴染で家が隣。
- ・兄と父母との四人暮らし。

本作では千鶴の恋愛模様が中心です。

愛羽雪音
あいばねゆきね

本作の準主人公。オリジナルキャラ。

外見：金髪。ロング。ピアスいっぱい。化粧。目は水色。

・絶世の美人であるが素行が悪く、不良だが生徒会書記。学校で一番の成績だが性格に問題あり。

・高3で剣道部マネージャー。

- ・ある理由で土方と同棲。土方の恋人。
- ・町の不良を束ねているボス的な存在。
- ・煙草吸つてる。

雨沢空幸
あめざわそらゆき

外見：金色のメッシュで茶髪。メガネ。関西人。オリジナルキャラ

- ・雪音と中学時代からの同級生。
- ・雪音と同じクラス。
- ・関西出身で、生徒会の手伝いをしている。

土方歳三
ひじかたとしじぞう

・鬼と恐れられる薄桜学園剣道部顧問で国語科教師。

・千鶴の担任。

・沖田の悪戯で病んでる。

・雪音とある理由で同棲。しかし彼は保護者のつもり。
・煙草はかかせない。値上がりしても禁煙する気なし。

沖田総司

おきたそうじ

- ・剣道部部長、高2。剣道の全国大会優勝者。
- ・学校一のモテ男。
- ・ドS
- ・小さい頃から通っている道場で土方と出会いそれ以来土方と一緒に悪戯ばかり。
- ・斎藤とは親友。
- ・ファンクラブ会員数多数。

斎藤一

さいとうはじめ

- ・風紀委員長。沖田と同じく剣道部で、高2。
- ・沖田と同じ道場に通い、土方を尊敬している。
- ・沖田と同じくらい剣道が強い。
- ・しつかり者で生真面目だが、天然なところも。
- ・土方の実家で作っている石田散薬が好きだそつ。
- ・総司と同じクラス。

藤堂平助
とうどうへいすけ

- ・成績が足りなかつたが無理して千鶴と同じ薄桜学園入学。
- ・沖田たちと同じ道場に通っていた最年少。
- ・いじられることが多い。

原田左之助
はらださのすけ

- ・土方と、永倉と仲がいい薄桜学園社会科教師。
- ・彼に惚れた生徒は数知れず・・・。
- ・恋愛経験豊富。
- ・一番危険な人（性的な意味で）
- ・よき恋愛相談相手（笑）

永倉新八
ながくらしんぱち

- ・土方と原田と仲がいい体育科教師。
- ・とにかく運動好き。
- ・全部の運動部の顧問ができる勢い。
- ・休み時間にはよく生徒と遊んでいる。

風間千景
かざまちかげ

- ・雪音と同じクラス。不知火とも。
- ・一様、薄桜学園生徒会長だがそれは名前だけで仕事をいつさいしない。
- ・風間コーポレーションの御曹司。天霧という男は風間のおつきでつねに一緒にいる（大変だな）
- ・我儘。俺様。
- ・千鶴に一目惚れ。
- ・影のファンでの呼び名はちーさま。

家の関係で不知火匡がいるが不知火は家の都合で一緒にいるだけ。

雪村薰
ゆきむらかおる

外見：千鶴に似てる。うん。

- ・千鶴の双子の兄。
- ・重度なシスコンである。
- ・沖田と仲が悪いらしい。
- ・風紀員。
- ・ドジな面も。

その他の登場人物サブではないが出番少ないかな～って人。

- 近藤勇こんどういさみ
- ・薄桜学園校長。
- ・昔は沖田たちに剣術を教えていた。道場主。
- ・気のいい人で沖田が慕っている。

鈴鹿千すずかせん

- ・千鶴と同じ年で親友。千鶴と同じクラス。
- ・風間に負けない金持ちで風間とは幼い頃からの腐れ縁。

あとは山崎くんとかもいるのですが出てくるかわかないで書き

ません。

まあ他サイトとかぶつてたらすいません。

と、これから書くことをここにまとめて書いていただけです。
それと、愛羽雪音ですが、新選組の女剣客（以前連載していた駄文
だらけの小説。今は削除しています）ともう一人の侍の
主人公です。外見は同じですが性格がちょっと違います。まあうざ
つとなるよつなら読むのをやめたほうがいいかもです。

設定（読みだ方がいいですか）（後書き）

タイトルの読み方は

シー・ウイース・アマーリー・アマーと読みます。

ラテン語格言よつ。

入学式（前書き）

第一話。

君を離れない。

入学式

ピロロロロ。携帯が突如鳴った。

「はい。」

「もしもし。総司！？あんたいつまで寝てんの？」

沖田は目をこすりながら、目を開け、携帯を耳にあてながら、窓まで身体を伸ばした。

白いレースのカーテンを開けると、いつも街並みが拝見できる。ふと、下へ目を向ければ何かと目立つ女が携帯を耳にあてながらこちらを睨んでいる。

「早くしないと遅刻するよ。一君はもう行つてんの？」

「すみません・・・。早く支度します。」

「わかった。」

沖田は携帯を閉じ、素早く自分の部屋を出て、洗面所に向かつた。

制服を着て、玄関を出ると、笑顔で彼女は迎えてくれた。

「早く行かないと一君に怒られちゃうからね。私が怒られたら総司が謝つてよね。」

「それは当然ですよ。雪音さん？びうじたんですか？」

「ええ？？ええ。実は私も寝坊しちゃって・・・。」

雪音はごまかすように薄く笑っている。この一年先輩の愛羽雪音は沖田が通っている薄桜学園の生徒会書記であり、沖田が所属してい

る剣道部のマネージャーであり、薄桜学園きつての秀才であり、県内でもトップクラスの不良だった。

しかし彼女は変わり者であつた。

「土方先生は・・・起こしてくれなかつたんですか?」

「え?ああ。トシはそんなことしないよ。ていうか起こしてくれても私寝てるつていつも怒鳴られる。」

彼女は懐から煙草を取り出しながら言つた。

彼女は何故か土方と同じ家に住んでいた。理由は詳しく聞いていいが、土方に聞けば保護者になつたらしい。

「しつかし。面倒くさいな。なんで明日から学校なのにその前日に、入学式なんていかなきやいけないのかな。」

雪音は煙草をプカプカ吸いながら愚痴りだした。

「それはこつちの台詞ですよ・・・。なんで僕が入学式に行かなといといけないんですか。生徒会でもないのに・・・。」

「一君は風紀委員だから出席するし・・・。私もある不眞面目俺様生徒会長さまがやんないから行くわけで・・・。それに考えてよ。剣道部に部員勧誘するいい機会じゃない?」

「別に勧誘なんて必要ないですよ。平助は入つてくれるでしょ。」

雪音のこともあって剣道部員は薄桜学園で少ないほうだ。しかし斎藤も沖田も全国大会でもいい成績を残しているので廃部にはならない。

平助は昔沖田が通つていた道場にいた少年で、今年薄桜学園に入るのだ。

「ふーん。まあいいけどさ。」

「雪音さんがいけないんですよ。そんな派手な化粧して、制服なんて乱れまくりで・・・。」

「あなたに説教されると思わなかつたよ・・・。」

雪音は少し苦笑すると煙草をゴミ箱に捨てた。もう少しで学校だ。二人は足早に学校へ向かつた。

「やべつ！始まってる！？」

「そうみたいですね・・・」

もう入学式は始まっている。斎藤に怒られる・・・。
二人はこつそり体育館に入つてなんとか席に着いた。目立たないようになしたが結構な新入生が一人を見た。

用意されている席につくと一人はふうと息をついた。

「遅い。何してたんだ。」

沖田の横にきちんと座っていた斎藤は沖田に向かってきつく言った。
「『めんよ～斎藤君。でもちょっと遅れただけでしょ？』

「もう式が始まつて三十分だ。」

「まあまあ一君。そんな怒らないで。」

沖田の横に座つていた雪音は小さな声で謝る。

「雪音さん・・・もつと重していください！あなたのそれは田立つ

！」

「は、一君・・・。」

斎藤は無意識に声を大きくしていたらしく、式が止まつてしまつた。
斎藤は少し顔を赤くしながらすみませんでしたと謝つた。

舞台の上では土方が何やら話している。

「ガラじやないなあ・・・トシがあんな真面目にしてんの。今にも出でいきたそうな顔してるけど。」

沖田はどうでもいいようにだらつとしながら新入生を見渡した。
どこつもこいつも緊張しているというか・・・。自分もあんな顔し

ていただろうか？

いいや。してない。たしか入学早々土方に怒られた。何したか忘れたけど。

しばらく田を配らしていると平助がいた。平助は顔を赤くして前を見据えている。あれは緊張している。

「平助いたよ。」

沖田がつぶやくと雪音が。

「え？ どこどこ？？ あ。いた。平助～！～！」

「うるせえ！！ そこ静かにしてろ！！！」

マイクが割れるほど大きな声で土方が怒鳴った。三人は固まつた。呼ばれた平助と言つと。

（うわ・・・・。相変わらず土方さん怖ッ！ もうヤダ・・・。雪音さんも相変わらずだな・・。）

と溜息をついていた。

「平助君・・？」

横に座っている千鶴は平助を心配そうな顔で見た。

「大丈夫？ 顔赤いし・・・。」

「だ、大丈夫だつて！！」

「そうだよ。千鶴。藤堂がおかしい訳ないじゃん。ねえ？」

割り込んできたのは千鶴の双子の兄の薫。薫は平助を小馬鹿にするような視線を送っている。

「う、うん・・・。」

平助は頷くしかなかつた。何時もいつも千鶴の傍にいる兄。性格は筋金入りで、平助は彼と似ている人物を知つていた。

堅苦しい式も終わり、三人は土方から逃げるよう校庭へ出た。
「ふ〜。あのときは心臓が止まるかと思ったわ。トシったら・・い

きなり怒鳴るんだから・・・」

「まあ。でもあれで叫ぶのはどうかと思いますけどね。入学式には期待を膨らませる生徒でいっぱいです。親も同じでしょ。」

「そうね・・・。って一君? 何処行くの?」

斎藤は何故か背を向けてどこか行くとする。雪音は首を傾げ聞いた。

「ひ、土方先生に」迷惑をかけてしまった・・・。

「そんなの気にしてないよ。ねえ。一君?」

「謝りに行きます!」

と言つとあつといつ間に斎藤は校舎へ消えて行つた。

「まあ。斎藤君は無駄に真面目だから許せないんでしょう。」

「あなたは無駄に不真面目ね。」

「雪音さんに言われたくないです。」

雪音はそれ以上何も言おうとしなかつた。反論できない・・・。

「さ。帰りましょ。平助はもういないでしょ。」

「やうですね・・・。」

と一人は帰ろうとしたのだが。

「あの・・・。」

「?」

二人が振り返ると、ピカピカの制服を着た少女が立っていた。

頬を染め、こちらを見る蜜色の瞳は恥ずかしがつているのだろうか。そんな風に見えた。

「い、いえ。あの・・・。なんでもないんです。」

(何故、私は話しかけたんだろう?)

千鶴自身こんなことをする性格ではない。何故知りもしない先輩に話しかけたのか・・・。

千鶴はさつとそこから立ち去つて行つた。

「あの子・・・。なんで話しかけてきたんだろう?・総司?」

沖田は目を点にして彼女が去つていた門をずっと見つめている。雪音は何度も呼ぶが沖田は反応を見せない。

「・・・彼女は・・・。」

「え?」

「いえ。なんでもありません・・・。雪音さん。何か奢つてくださいよ。」

「あ?なんですよ。」

「入学式大人しく來たじゃないですか。」

「・・・。」

雪音は頷くしかなく仕方なく沖田に食事を御馳走した。
けれど雪音は気付いていた。

沖田は、絶対に何かを感じたのだ。
先ほどの少女から。

「面白くなつてきた。」

「え?」

「つづん・・・。」

雪音はこの好奇心を止められなかつた。

入学式（後書き）

更新遅いです。

桜心（前書き）

第一話

待ちかねる。

「うー。面倒くさいなあ。」

「じゃあ、来るな。」

雪音は布団にくるまりながら学校に行きたくないと駄々をこねはじめた。見かねた土方は睨みながら怒鳴つてやつた。

「いやそー。昨日なんか総司が様子変だつたんだー。」

「はあ？ いきなり何の話だよ。」

「昨日入学式だつたでしょ？ なんか総司に話しかけてくる一年生がいてさ。しかも女の子。」

「はつ。あいつに話しかける物好きがいるとはな。まあ。あいつは顔がいいからな。その女は惚れたんじゃねえか？」

土方は靴を履きながら言つた。雪音もそのまま玄関まで向かつた。土方の隣で、囁くような小さな声で。

「そุดとなんか面白いな。」

「ああ？」

雪音がとぼけているような笑顔を向けてくるので土方は頬をつねつてやつた。

「三年になつた早々遅刻すんなよ。いつてくる。」
と振り返る」となく土方は出て行つた。

「おい！千鶴。早く行くよ！」

「ちょっと待つて～！」

千鶴は部屋で必死に制服に着替えていた。入学して二日目。今日は新しいクラスに行くのに寝坊してしまった。

実は昨日中々眠れなかつたのだ。理由は自分でもあまりわからない。ただ昨日の少年の驚く顔が忘れられなかつた。

（あの人と話したくない・・・・。会いたくもない・・・・。）

そんな風に思うなど最低だ。何も彼のことを知らないのに・・・。けれど胸が締め付けられムカムカするのもう嫌だつた。

（先輩だろうし・・・・。中々会わないよね・・・・。）

「ち～づ～る～！！」

「今行きます！～！」

玄関で一いちりで睨んでくる双子の兄は怖い。千鶴はへこへこ謝りながら。

「ごめん。薰。じゃあ行こう？」

「全く。お前のせいで入学早々遅刻だつたら許さないから。」

「う・・・・・返す言葉もないです・・・・・。」

玄関を出て、学校までの一本道を一人で歩いた。後ろを振り返つて平助が来ないか見たが姿は見当たらない。先に行つたのだろうか。「藤堂なら先に行つてるよ。千鶴が遅いから俺が行けつて言つたんだ。」

「そつか・・・。薰が言つてくれたんだね。ありがと～。」

「ふん・・・・。」

千鶴が微笑んでお礼を言つてきたので薰は純粹に照れた。

「あと、五分しかない・・・。千鶴！」

「え？ ああっ。ちょっと！」

薰がいきなり手を掴んできたので千鶴は驚きながらも走り出した。

「ま、間に合つたかな・・・。」

「間に合つていしないな。」

「へ？」

門の前で誰もいないと思ったが薄桜学園の制服を着た千鶴より先輩と思われる男がこちらを静かに見ている。

「遅れて申し訳ありません！！」

千鶴は頭を下げるが、薰は。

「千鶴。こいつに謝つても仕方ないよ。それにまだ遅れてなんかいない。」

「えつ？」

「そうでしょ？ 昨日入学式に居た先輩。」

そういうえば彼は昨日いた氣がする。あの男前な先生がつるさいと言

んだ先にいた人……。あの少年と、金髪の女子の横にいた人だ。

「そうだな。正確に言えばまだ三十秒ある。」

「ふん。三十秒なんてもつすぎるよ。俺は行くからね。千鶴。」

「ええ！？」

「だつてこの人がいるのはお前のチェックだよ。そのスカートとかの。そうでしょ？」

薰は歩きながら振り返らず言つと斎藤は千鶴を見て。

「少しへスカートが短い。」

（なんか怖いよ～。）

薰は見捨てた。そう思ひざるおえなかつた。

という斎藤は。

（俺は風紀委員として一人一人の生徒の服装を見なければならない。・・・。先生の期待に添わなければならぬ。さきほどの生徒は何も規則違反していなかつたな。）

と超真面目な考えを巡らせていた。

チャイムは知らぬ間に鳴つていて千鶴は少し泣きそうだ。入学早々遅刻・・自分が悪いかもしれないがここまで必死に勉強して入った高校だ。なんか嫌だ。

「よし。入つていいぞ。」

「え？あの・・・。」

「何だ？」

「教室がわからなくて・・・。」

その時だつた。後ろから足音がした。同じ遅刻した仲間だらうか。そう思つて振り返ると。

「あら。一君。何してんの？新人生捕まえて。」

金髪でスカートが短く、上もTシャツが見え隠れしている。指定のリボンも何故か違つものだし、ブレザーもめくつてい。耳にもピアスをしているし完全なる不良だ。千鶴は昨日の人だと一発でわかつたが間近で見ると怖い。中学にも不良はいたが関わらないようになっていた。

雪音はその瞳をゆらゆらさせて千鶴を見ていた。

「早いですね。雪音さん。」

「ん？ああ。そうだね。今日は割と早く起きたんだよ。」

雪音は微笑みながら斎藤の隣を通り過ぎるかと思つたが千鶴の手を掴んで少し引き寄せる。

力が強くて千鶴は心臓が飛び出しそうになつた。

「場所わかんないんでしょ？案内してあげる。じゃあね。一君。」

「え？あのっ・・・！」

訳もわからず千鶴は連れ去られた。

「何組かなー。あ。お名前は？私は三年・・・・C組。愛羽雪音です。」

「ゆ、雪村千鶴です・・・ええと・・・一年A組みたいですね。自分の名前があることを確認すると一人は一年の校舎に向かつた。

「そつかあ。千鶴ちゃんねー。」

雪音はルンルンしながら嬉しそうに千鶴の横を歩いた。

「あの、愛羽先輩は自分のクラスに行かなくていいんですか？」

「ああ。こいのいの。私はどうせきちんとできなって思われて

るから教師も何も言わないよ。できないのが当たり前なんだよ。」

「……そうなんですか……？」

「やうやう。私は眞面目じゃないし……。まあ学校で態度は悪いけど喧嘩も最近してないし成績は結構いいから退学にはならない。これでいいかなって思つてさ。」

雪音は大丈夫と笑いだす。けれど千鶴には彼女が無理をしているようになかなかつた。

「ああ。あそこだよ。ここらへんが一年のクラス。今頃先生が話してゐところだね。入りにくいねー。」

「うう・・・・・。」

千鶴はもう嫌になつた。ここで入るなんてものすく勇気がいるといつか・・・恥ずかしい。

A組の前で立ち止まると自分の心臓の音が聞こえてきた。指の震えが止まらない。

「大丈夫だよ。千鶴ちゃん。私が開けて先に入るから・・・。」

「え? そんな・・・。」

「いいからいいから。」

と言つと雪音は勢いよく扉を開けた。一斉に皆の視線がこちらに向いた。

「・・・てめえ。何しにきやがつた。」

この不機嫌な声は、昨日怒鳴つた先生だ。

「あら。トシが千鶴ちゃんの担任なんだー。千鶴ちゃん。この先生怖いから氣をつけてね。しかも口リコンだから。」

「いい加減な事言つんじゃねえ! ……せつざと出でにけこの不良が! ! 」

雪音に思い切り怒鳴つた土方はイライラが最高潮に達した。雪音は笑つて。

「じめんじめん。行きますよ。ああ。千鶴ちゃん。早く入つて。」

雪音にひっぱられ教室に入れられた。皆に見られるのはやはり変わらない。千鶴は顔が赤く染まって行くのを感じた。

「お前、遅刻か。雪村千鶴だな。」

「は、はい・・・。すみません・・・。」

「あそこの席だ。お前も不運だったな。あんな女に捕まるとは・・・。

。

「あの。聞こえてるんですけど。」

雪音は土方にぶすっとした声で言った。土方は無視し。

「えーと。じゃあ続きだな。明日は・・・。」

「何よ。わからんないから連れてきたのに・・・。」

「あ。ありがとうございました。」

千鶴は丁寧に頭を下してくれたので雪音はご機嫌になつた。

「うん。千鶴ちゃんはいいのよ。問題は鬼の国語科教師よ。」

「ああ? 何か文句でもあるのか?」

「いやせー。いきなりみーんなびびつてるなって思つてさ。」

雪音は笑顔で教室を見渡す。

「お前にびびつてるんだ。お前がそんな恰好で来るからな。さっさと出でいけ。馬鹿! !

土方は問答無用に扉を閉め、鍵をつけた。

「よし。でだな・・・。」

と話を始めた。

こうして千鶴の新しい学校生活が始まった。

学校一、いや県内一の不良娘、愛羽雪音に捕まつたことで大きく千鶴の思い描いていた高校生活は変わる・・・。

「やつぱり面白いな。」

雪音は一人呟きながら自分の教室に向かつた。

光榮（前書き）

第三話。

穢れなき心。

千鶴が入学して一週間が過ぎた。千鶴は早いなあと一人思っていた。

「何、ぼーっとしてるんだよ。千鶴。」

「平助君・・・」

いきなり背を叩かれてびっくりして平助を凝視してしまった。平助とは同じクラスになつた。小学校から一緒に家も隣だつたので長い付き合いになる彼。中学では三年の時同じで今年もまた同じだ。彼は千鶴と違い、元気でクラスの人気者だった。実際まだ一週間だがもうクラスの中心になつてしまつている。

一番の理由は担任の土方がいじつているからだらう。

「なあ。早く帰らねえ？俺ちよつとさ・・・。」

「ちよつと何？」

「いや・・・。薰は？」

「薰は先輩に呼ばれたんだって。」

「先輩？」

「斎藤っていう先輩。風紀委員の人なの。」

「一君が？」

「知ってるの？平助君。」

平助は昔、というか此間まで近所の道場に通つていた。斎藤はその

先輩で無口だけど平助と結構仲良くしてくれたのだ。

「まあ・・・。一君と薰だつたら大丈夫だろ!」

「え? 何が大丈夫なの?」

「べつに! ほんじゃあ、先に帰つてよづぜー!」

平助にかばんを持っていかれて千鶴はそれを少し苦笑しながら追いかけた。

あれから、千鶴は平和に過ごしていた。

土方はあの女に捕まつて可哀そつたと言つたがあの不良の先輩はあれから姿をまるつきり見せなかつた。

千鶴は安堵したことは嘘とは言わないが退屈してきたのかもしけない。

友達はなんとかできた。鈴鹿千という可愛い女の子。

彼女は優しくて話も合つた。

ただ千鶴はこんな日々が続いてほしいと願うものの何かしたいと思うようになった・・・。

「はあ・・・・・。」

「何溜息ついてんだよ。土方さん。」

同じ薄桜学園の教師であり、昔同じ大学の先輩後輩である原田左之助は煙草を吸いながら頭を？している土方に「コーヒーを差し出した。

「おう。サンキュー。」

「で。どうしたんだ？」

「別に。問題はねえんだが・・・。」

「ねえんだが・・・・？」

「総司の奴が変なんだよ。」

「変？」

「俺に悪戯しねえし、眞面目に授業も受けけるし、部活も眞面目にしてやがるんだ・・・・。」

「土方さん・・・・。」

それは当たり前のことだらう。けれど原田も沖田のことはよく知っているしおかしいと思ひ。

「気持ち悪くてよ・・・・。なんかこう・・・・。」

「わかつたわかった。土方さん。総司に聞いてみたらどうだ？」

「何を？なんで俺があいつに聞かなきやなんねえんだよ。」

土方は不機嫌に睨んでくる。正直言つて本当に怖いのだ。けれど原田は逃げない。

「だつてよ。気になるんだり？だつたら聞いてやればいいんだよ。」

「・・・・・・ちつ。」

土方は舌打ちをして出て行つた。原田はふうーと息を吹き、ぐるぐる回る席に座る。ぐるっと一回回ると見慣れた顔が田に映つた。

「あん？新ハ。」

「土方さん悩める女みてえだな。」

「はあ？ 気持ち悪い事言つたな。それに、なんでそんな汚れてんだよ。」

新八の姿は年がら年中ジャージだが、それが土に全身汚れていた。

「え？ いやせー。俺のマイ生徒とたちと楽しくサッカーだよ！」

新八は無駄に輝きながら原田に見せ付けてくる。それが永倉新八だと原田はよく知っているので微笑んだ。

「それにしても・・・。総司の奴どうしたんだ？」

「総司。」

「ん？ 何、一君？ 話終わつたの？」

胴着を脱いでいると後ろから斎藤の声がして沖田は振り返つた。斎藤は先ほど仕様で出掛けていたのだ。

「ああ。雪村薫は風紀委員の仲間入りだ。あの性格なら俺が卒業した後もしっかりと学園を統括してくれるだろう。」

「そんなこと考えてるんだね・・・。」

沖田は少しこの斎藤の性格に苦笑した。眞面目すぎるだろう。

(そついえぱ・・・・・)

彼女は何組になつただろうか？彼女の名も知らない。

浮かぶのは彼女の不安そうな顔だつた。

「どうした。総司。帰るぞ。」

「う、うん・・・・・。ちょっと待つて。」

沖田は胴着をロッカーに持つて行つて扉を閉めた。
部室を出るときに人をぶつかつた。

「あ。」

「あら。総司。もう帰るの？」

雪音は優しく微笑みながら言つてくる。沖田は少し氣恥ずかしくな
つてきた。

「はい。失礼します。」

雪音の横を通り過ぎよつとしたとき・・・・。

「！？」

雪音が突如沖田の腕を掴んだ。雪音は何かと力が強く普通の男子な
ら負けてしまつ。小学生ぐらいのこの腕なら折つてしまつ勢いの力
強さだ。

「なんですか・・・・・？」

「総司・・・・・。あんた・・・・・。」

雪音は何か言おうとして途中でやめてしまった。微笑むだけで何も
言わない。

「ごめん。なんでもない。」

雪音は何故かどこかへ消え去ってしまった。まるで消えていく雪の
ように・・・・・。

「総司。最近真面目にしているようだな。クラスでの評判もいいぞ。

「何それ〜。一君もおかしな事言つんだね。」

沖田は帰りの道を斎藤と歩きながら笑つて言つた。斎藤は真剣な顔で言つが沖田はそんなつもり全然ない。

いつも通りに過ごしているだけなのだ。なのに皆真面目だと言つ。さつきの雪音もそうだ。何も言わなかつたが沖田を確かめるような瞳だつた。

「いつもそのぐらい大人しいほうが俺としては安心だ。」

ふふんと笑いながら行く斎藤はいつも通りだ。

そんなに自分は不真面目だったか。

いやまあ。かつてしてきたことは確かにおかしいことばかりだったが・・・。

(どうして何か、こうもやもやするんだろう〜)

理由がわからなければどうしようもない。

沖田はどうしたらしいのか頭を抱えてしまいたい衝動に駆られた。

「それでさー。あいつが・・・・・。」

その時、後ろから声が聞こえたのでふと振り返つた。いや割と聞きなれた声だつたからか・・・。

目に映つたのは平助の全身。その隣にいたのは・・・・。

「あれ・・? 総司? 一君?」

「平助・・・・。」

ともう一人。
彼女と再会した。

光栄（後書き）

沖千臭が臭いなあ・・・。
そんなつもりじゃあ・・・。
駄文ですみません。

今回は適当に決めてます。

使者（前書き）

第四話。

燃える思い。

千鶴は入学式に自分が話しかけた男だと一瞬で気付いたが、逃げ出したい衝動に駆られた。彼を見ていると胸が痛み、苦しいのだ。

「平助。お前、まだ剣道部に入部届だしていないのか？」

斎藤はゆっくりと近づいてきた。千鶴は自分は見られていないと思つても斎藤の冷静な顔と声に驚く。恐怖も入つたかもしれないがそれほどではない。

「うつ・・・だつてさあ・・・」

平助は何故だか返答に困っている。道場に通っていた彼は薄桜学園の剣道部に入るのが当たり前だった。けれども平助だつて選ぶ権利がある。それで色々悩んでいたのかもしない。

「お前は、入学早々遅刻した女子だつたな。」

こちらに話がいきなりふられたので千鶴は心臓が飛び出るほどびっくりした。目が見開かれ反応が遅くなつた。

助け舟を出してくれたのは平助だつた。

「一君、その言い方きついよ。千鶴、真面目だから今まで遅刻なんかしなかつたし気にしてるんだよ。なあ？」

それはズバリ当たつているので千鶴は頬を赤らめながらもなんとか頷いた。

じじりと斎藤が見つめてくるので千鶴は思い切つて自己紹介した。

「い、一年A組、雪村千鶴です・・・。あの・・・。斎藤先輩よろしくお願ひします・・・。それと・・・。」

彼を無視する訳にはいかない。と千鶴は目を向けたのだが。彼は驚くほど真剣な表情をして千鶴を見つめていた。瞳にはくつき

りと千鶴が映つてゐる。

「雪村？ 薫は・・・。」

「あ。 薫は私の双子の兄です。」

「そうか。 どうりで顔が似てゐると思った。」

斎藤は納得するよつてうんうんと頷いた。すると今度は沖田に目を向けた。

「総司。 後輩に挨拶しろ。」

「・・・・・。」

沖田は中々口を開けよつとしない。しばらく黙つてから。

「じめん。 一君。 今日、デートだから。 早く帰んなきや。 じや。」

「おい！ 総司！」

沖田は背を向けてさつと行つてしまつた。千鶴だけは気づいていた。

沖田が一瞬じらりを見て一ヤリを笑んでいたのを・・・。

「ん。」

雪音は家で寝ころびながらテレビを見ていたところ携帯が光つたのに気づき携帯をソファーから拾い上げた。開くと珍しい名前が。

「・・・・・。 へー。 一君がね・・・。」

「ああ？ 斎藤がなんだ。」

「

風呂上りの姿の土方歳二。タオルで頭を拭きながら雪音に近付く。

「ん？ああ。一君が、総司の様子がおかしいって。なんかね。雪村千鶴ちゃんってトシのクラスの子と平助と帰りに会つたらしくて。けどあの総司が挨拶もなしに帰つちゃつたらしー。しかも『トートあるからつてことで。』

「ふん。あいつ、女癖悪いだろ。一年のうちに十何人いたと思ひづか。数えてねえけどな。」

「うん。けど最近付き合つてなかつたし、それなら自分が初めに知つてるだらうつて一君が。」

「斎藤の奴・・・・・。総司に気をつかいすぎだ。」「仕方ないんじやない？小学校から一緒に、道場も一緒に。総司も一君も普通の子とは少し違つし、一君すごい総司のこと大事にしてると思つよ。」

沖田に散々悪戯されてきた土方はあの真面目な斎藤が沖田を大事にしているという事実が面白くない。

否、斎藤があの沖田をそこまで思つてくれるのは嬉しい。「でも・・・・・。最近、総司おかしいから。本当に。」

「・・・・ああ。俺も思つ・・・・。」

土方は雪音の横に座るとテーブルに置いてあつたお茶を飲み干した。沖田が最近真面目すぎて気持ち悪かつたのは事実だった。

「やつぱり、あの子だよ。」

「はあ？あの子？」

「千鶴ちゃんだよ・・・・・。」

「ああ？なんで雪村が出てくるんだよ。」

「言つたでしょ？入学式の時に総司に話しかけてきた一年生。あれ、千鶴ちゃんなんだよ。」

「・・・・そうだったのか。」

あの大人しそうな千鶴が総司のようなちやらい男に話しかけるとは考えにくかった。

「あの時の総司の顔、いつもと違つた。何かあるよ。」

「たとえば？」

「たとえば・・・・・。恋?とか。」

土方は大笑いしだした。あまりに土方が笑うので。

「そんなに笑わなくともさあ・・・・・。」

「ああ。すまねえ・・・。けど、あいつが恋ー?ありえねえ。ありえねえ。」

土方ははははと笑いながら部屋から消えて行つた。その時、雪音は考えていた。

楽しい事を・・・。

どんなことがあっても朝日は必ず昇る。

千鶴は寝不足な目をかきながらなんとか学校への通学路を歩く。平助はどうやら剣道部に正式入部するやうで今日届をだすと言つていた。

(いいなあ・・・・。平助君は、すぐしたいことが見つかって。) 千鶴にはまだ見つからないのだ。

高校生は中学生の時と違つて割と自由だ。バイトもできるし、都会

な場所で友達とぶらぶら・・・。

中学の時には許されなかつたことが多少は許されるのだ。

クラブに入りたいとも思うが何をすればいいのだろう・・・。

バイトはダメだ。校則で禁止されている。

「クラブの評判とかも何も知らないもんないもんない・・・。

「なーに。独り言言つてんの? 千鶴ちゃん。」

「うわあああ!」

ビックリして腰を抜かしてしまつた。まさか人に話しかけるとは思わなかつた。

「千鶴ちゃん!? 大丈夫?」

「いてて・・・。あ、いえ・・・すみま・・・。」

顔を上げると、透明な瞳と目があつた。頬は雪のように白くて目を奪われる美人・・・。金髪のまぎれもなく入学早々助けてくれた? 人だ。

「愛羽先輩・・・。」

「あ。覚えてくれてたんだ。はい。」

雪音は美しいその手を差し伸べてくれた。千鶴はその手をとつて起き上がつた。どうしてか、彼女の手は冷たい。

「ごめんね。そんなビックリさせるつもりじゃなかつたんだ。」

「い、いえ・・・。すみませんでした・・・。」

千鶴が丁寧に謝るので雪音は慌てた。

「いいのいいの。さあ。遅れるから歩こう?」

「は、はい・・・。」

千鶴と雪音は一緒に歩いた。

けれども千鶴はじろじろ見られるのでそれが耐えられなくなつた。しかし途中、雪音が。

「ごめんね。私、こんなナリだから仕方ないの。薄桜学園で金髪は二人だけだしね。」

雪音だけではないのだ。まだ派手な人がいるのか・・・。

「ねえ。そういえばクラブの評判とか言つてたよね? あれつて学校

の「こと?」

「は、はい・・・。何かクラブに入りたいとは思つんですが、何があるかもわからなくて・・・。」

「そうね・・・。なら、今日はひょうびーこんじゃないかな。」「え?」

「今日はクラブ紹介の日だから。」

雪音の笑顔には何か裏があるよつた気がした。ただの直観だが。けれどクラブ紹介はいいと思う。色々なクラブの説明を体育館でしてくれるらしい。

「それで決めたら?」

「はい。そうしようつと思います。」

千鶴は笑顔で言つ。ちよつどその時学校に着いた。

「じゃあ。午後にね。千鶴ちゃん。」

「はい。」

千鶴は頭を下げて雪音を見送り、その後に学校へ入った。

「雪音。」

「何? 空幸。」

同じクラスで高1からずっと一緒に雨沢空幸が話しかけてきた。彼はあまりクラスで話さないので珍しい。

「今日はどうするんや? 午後からクラブ紹介やけど今日も余長おいらんようやしな。」「

生徒会長はまだ学校にも来ていない。同じクラスだとこの……。
・。空幸は生徒会でもないが色々と手伝ってくれた。

「やうだね……特に準備する」とはないよ。今日は単なる紹介だし。」

「そうか？それならええけどな。お前はひいちゃんや、剣道部。」

「何が？」

「何がって。お前のせいでお部員減ってるんやろ？」

雪音だけのせいではないが雪音も原因の一つだ。不良と言つてのりこの割と金持ちは多い生徒たちは雪音とかかわろうとしない。土方も厳しいので入るのをためらうものは多い。

しかしこの薄桜学園は全国大会優勝という輝かしい成績を残している。それは全て沖田のおかげだが。

「まあ。最初は入つてくるよ。マネージャーもね。」

「はあ？なんでマネーが入るねん。」

「そりや、総司がもてるからよ。」

「・・・・・。」

あまりもてない空幸は沖田のことがあまり好きじゃない。沖田は確かに自分より数段イケメンといふことは認めるが……。

「でもあんな性格ねじまがつてる奴がもてるなんて不条理だ……。」

「知らないよ。そんなの。まあ。いいじゃん。あんたはまだ顔はいいくて。」

何とも言えない励ましを雪音はしてくる。正直迷惑だ。

「最初は皆、ミーハーは多いけど最終的には根性ある奴が残るの。ここは厳しいからね。まあ。後継者マネージャーがミーハーじゃ困るね……。」

「せやけど、ほんまに剣道好きで入るのは少ないんぢやうんか？ほんまに好きでも沖田とかに曰くへ女子はめこやね。」

「まあまあ。私を信じなさいって。」

雪音が面白そうな顔をするので絶対いい事考えていないこと空幸は思つた。

使者（後書き）

千鶴のクラス間違えました。すみませんでした。

高貴（前書き）

第五話。

我が胸の悲しみ。

「総司。わほつてないで体育館に来なさい。」

屋上で思つ存分さぼつている沖田に雪音は怒鳴りつけた。

「えー。嫌ですよ。面倒くさい。体育館で僕が何するんですか。」

「あんたはいつも通りの練習を見せ付ければいいの。演武的なものを見せるんだから。あんたの太刀筋は演武みたいだし。」

「意味わかんないです・・・・。」

それでも沖田は口をとがらせて動こうとしない。雪音は少し困った。いらないならないでなんとかなるがいたまうが雪音にとつてはいい。雪音の考へている事が実現するだらうか。

「あんた、おかしいよ。どうしたの?」

「何がですか。僕はいつも通りしてんじゃないですか。こうしてわほつている訳だし。」

「けど、トシには何もしてないじゃない。」

「最近は面白くできないからですよ・・・・。」

沖田は空を見上げては溜息をつくよつて息をしていた。髪音はこの鉛色の空はあまり好きではなかつた。

「千鶴ちゃんのこと気にしてる? 聞いたよ。あんたがあんな可愛い女の子に挨拶もなしに帰つたんだってね。」

「あはは・・・。斎藤君、意外におしゃべりなんだよね・・・。

沖田は苦笑して雪音を見つめた。そして目を伏せて言った。

「わかんないんです・・・。自分でも、ただ彼女を見ると、心が変になる。なんて言つたらいいかわからないけど。」

雪音はしばらく沖田を見つめたがやがて振り返った。

「もうすぐチャイム鳴るから。早く来なさいよ。」

そう言い残し、雪音は踵を返した。

午後からは新入生のための歓迎会もある、クラブ紹介が行われた。雪音は一様生徒会の書記なのでこの場をしきらなければならぬ。他の正式なメンバーは皆あまり学校へ来ないのでほとんど一年間雪音が仕切っている。

同じクラスの雨沢空幸は手伝ってくれるが割とシャイなので前で話したがらない。

雪音は少しやる気なさげにマイクを片手に会を進行した。

いつもながらに雪音への視線は痛い。土方や原田、永倉は雪音のことを羨妬ではないがよく話してくれるので何もないが、ほかの教師はただの落ちこぼれと言つて見るのでそれが生徒にも伝わるところはある。これは中学の時からずっとなので気にはしないのだが。式は計画通りに進んでいく。最初におめでとうの言葉、この学校の明るい決まり・・・。くだらないことが多い。次にクラブの紹介。

この学校は結構部活が多いので時間がかかる。

野球部から、マイナーな博物館研究部まで・・・。そして剣道部の番になつた。

「雪音さん。」

舞台の袖に現れた沖田。雪音は嬉しそうな顔をして沖田を舞台上に招いた。

しかし問題がある。剣道の相手はいないし、胴着を着なければいけないので道場でやつているようなひ一人素振りはできないのだ。これでは話すしかない。

「総司。何か話してよ。」

雪音は小声で囁いた。

沖田は仕方がないといふような顔でマイクを受け取った。

「あれ。総司だ。何やつてんだ？」

平助が呟いた。千鶴は平助の隣で自分の胸を手でつかんでいた。彼が、いる。千鶴の目に映つてゐる。心臓が高鳴つた。

「えー。新入生のみなさ・・・。」

「きやああー！沖田くーん！ー！」

三年生のほうと、一年生のほうから歓声があがつた。

これが沖田総司である。甘いマスクと人当たりのいい性格・・・。

学校一もてる男で薄桜学園女子の憧れの的だった。

沖田は微笑みながら気にせず続けた。歓声はあがり続け、やがて沖田を知らなかつた一年生も少し騒いでいる。

「あの人つて剣道全国大会優勝者でしょ？マジすごい～。」

「しかもすごいイケメン！！私気になるかも！」

「うんうん。今度お話に行こうよ。」

と千鶴の近くの女の子たちが同じような話を次々しだした。

「す、すごい・・・。」

千鶴は単純に思つた。本当にモテるんだ・・・。

「たくよ。なんで総司の奴あんなもてるんだ。腹黒ドリのへせして

۱۰۰

平助は一人ごちているがいつたい何人が平助の言葉を信じるだろう。
千鶴は話したことないのでわからなかつた。

「以上です。厳しいんですけど剣道に興味があつたら入部してね。

「はい！」

誰も返事をしあひと言つていないので女子はわーわー騒いでいる。沖

田は笑顔をふりまきながら舞台から消えた。

「總同。よかつたぞ。」

「斎藤君…………。」

斎藤は何故か満足そうに微笑んでいる。その横で雪音も笑んでいる。

「まあ。総司らしい爽やかな言葉だつたね。トシがふんつてめつち

や笑つてた。

「あはは・・・。土方先生・・・。後で何しようかな。そうだ。煙

草を全部水にうかせてやるわ。そうしよ。

「聞こえてるわ。・・。総司。

土方が横から現れたので沖田はものすごく苦い顔をしだす。

「なんだ。てめー。俺の顔見るなり・・・。」

「別にー。土方先生がいつもみたく煙草臭いなあと思つただけです

よ。本当、雪音さんも大変ですね。

「大丈夫よ。私も吸つてゐるから。」

雪音は笑顔で言つたが教師の前で言つてはいけない。斎藤は先輩であ

の書類が届いたときには、必ず注意するのが中々治りなー。

「じゃ。僕帰つていいでしょ。」

「な？」

沖田が帰るといいだしたのでみんなの目が点になつた。

「だつて疲れちゃつたし。じゃあ。」

沖田は手をふつて体育館をふらりと消え去つて行つた。

「何だ。総司の奴。普通じゃねえか。」

黙つてみていた原田は雪音たちに近付いてきた。原田の横には永倉もいる。生徒たちは次々に教室に帰つて行つている。

「いやー。まだ何かおかしい。」

「お前の言つことは当たらねえよ。新ハ。」

「なんだよー左之ー俺がいつも当てるねえって言つのか！ー？」

うんと皆が一斉に頷いた。

「くそあ・・。てめえら・・・。」

「ま。私の思い通りなら大丈夫だよ。」

「？」

雪音の言葉を誰も理解することはできなかつた。

千鶴は適当な時間に体育館から出た。いつの間にか平助たちと離れてしまった。人ごみに紛れる中、教室へ戻つていく。

千鶴は、また無意識に彼のことを考えていた。顔も、声も、全て脳裏に浮かぶのだ。

（どうしちゃったの・・・。私、どうして・・・。こんなにムカムカするんだろ？）

ムカツクと言つた方がいいかもしない。今はそんな気分だ。そして、あの挑発的な雪音の笑み。もしかしたら雪音は千鶴のことを見透かしているのかもしれない。あのクラブ紹介の話をしたのは・・・。

きっと千鶴の興味を本当に向かせるため・・・。

千鶴は奥歯を噛みながらガツガツ歩いた。

「そんな剣幕で歩かないでよ。怖いよ。」「つー？」

振り返ると、ムカムカは消えて、ただの幸福が待つていると思つた。

高貴（後書き）

自己紹介が遅れました。春桜と申します。

私は以前、沖千小説、新選組～武士たち～を連載していました。薄桜鬼で検索の方は多分見つかるかと思います。

今回、タグには沖千と書いていません。なのでどうなるかは私次第ですね（笑）

今回の小説は、沖田は積極的じやないです。よく沖田は積極的に千鶴に抱き着いたりする描写が多いと思います。けれど今回は恋愛がテーマです。キャラより人間をいかしたいと思いました。

沖田たちをひきだたせるのが雪音です。雪音は色々なことを抱えている少女で、沖田の先輩です。彼女のことも色々触れて行こうと思います。

出番が少ないのは、原田たち大人組かもしません。私はあまり学園物は書かないで知識があまりないのでぐちゃっとなっているかもしれません。ようするに駄文。

色々な方向を考えました。一発で沖田が惚れて、ちょー積極的に18禁とかね・・・しかしあ今回は、沖千ではないですから。最終的にはわかりませんが。

末永くお付き合いできればうれしいです。

では次回。

血田（繪畫版）

第六話。

信頼の恋。

彼の目と田が合ひ千鶴は自分が吸い取られそうになつた。沖田は微笑みをたやさないまま、千鶴に近付いてくる。

千鶴は声も出ず、そこからも動けなかつた。

「じゃあね。」

と沖田は千鶴に触れることもせず、それ以上何も干渉しようとした。千鶴は何故だか信じられなかつた。当たり前のことだ。名も知らない女子に無理に干渉する方がおかしい。けれど千鶴は勇気を振り絞つて。

「あのっ！」

と去つていいく沖田に呼びかけた。彼はピタリと止まり、振り返つた。それでも千鶴には何も言葉は見つからないのだ。時間が止まるように頭の中が真っ白になつた。

「い、いえ・・・・。あの・・・・。」

「あのおさあ。君。」

沖田は面倒くさそうな溜息をつきながらこちらに来る。どうやらと自分の心臓の音が彼に聞こえていないだらうかと心配になつた。「どうかで会つたことがある？」

「・・・・・。」

千鶴は田を点にした。あつたことある？

「い・・・え・・・・。」

「そうだよねー。うん。きっと町で見かけたりとかだよね。いや。僕、色々な女の子と付き合つて最初の方の子は顔も覚えてないから君はその内の誰かに似てると思ったんだよ。」

ふんわりといったずらに笑つ沖田は明らかにからかっている。千鶴はどうしてだろうか。そこから全速力で走り去つた。

色々な生徒に走っている姿を見られながら、なんとか校門の外へ出了。

もう足が痛くなつて息ができないほど全力で走った。小学校の運動会の時のように。

息が上がるとともに、涙が溢れて止まらなかつた・・・。

夢を見る。毎晩毎晩・・・。

私はずっと誰かの手を握つていて、そのぬくもりを確かめている。

私が呼ぶ声はどこかで聞いたことがあつて本当に優しい声。

私は笑いながらその人の名を呼ぶ。

でも何故かその名がわからない・・・。

わからないの・・・。

「・・・っ！」

気が付くと自分のベットの上だ。またうなされたのか。

千鶴は二日前からろくな眠れていなかった。あのクラブ紹介の日から・。

舞台にたつた沖田総司。千鶴は、彼の魅力に取りつかれ、やはり彼に近付いていた。

あの入学式と同じ感覚で・・・。

偶然ではない。あれは自分から近付いたのだ。

このムカムカも、何もかも今まで感じたことのない事。夢はほとんど覚えていない。あの手を握る感覚は覚えているのに。その後の怖い夢はうなされて終わる。

「朝が来たら、大丈夫。」

不安なのか、恐怖なのかわからないけど背筋が寂しい感覚は目をつむつていれば消え去る。

心の中の、千鶴の理想の誰かは千鶴を傷つけたりしないのだ。

「ねえ。もうクラブ決めた？」

「私、卓球部に入る！今日入部届持つて来たの。」

千鶴の後ろの席の女子たちが楽しそうに話している。

千鶴も何か入りたいと思うものの、思い浮かぶのは・・・。

「おっはよーう！千鶴ちゃん！！」

「わっ！？お、お千ちゃん・・・。」

後ろから思い切りたたかれて千鶴は驚いた。振り向けば可愛く笑っている親友の鈴鹿千がいた。彼女は中学の時から一緒に高校も偶然一緒になつた。彼女は国でも有名な会社の愛娘だ。

「どうしたの？千鶴ちゃん。元気ないね。」「そんなことないよ・・・?」

千鶴は第一歩を踏み出します。

千鶴は笑いながら嘘をつく。嘘は苦手だ。すぐばれる。

「ふーん……まあそんなに氣になる」とさやないならいいが

励ますよへに語つてくれる千の言葉は千鶴にとって本当に大切な言葉。

そんな時 千鶴の自由が奪われた

廊下側の窓から金髪の雪音は大声で叫んだ。その瞬間、教室だけじ

雪音を見た。雪音は何故か満足そうに微笑んでいる。

んま声だすな。」

110

「俺は男やからええんじや。あー、ハセレハ朝から、雲村やーん。」

どうやら空幸は一年生のクラスで話すのは平氣なよつだ。雷音はおかしい奴だと心の中で思つ。

なるのでは・・・。

皆が千鶴に注目する。千鶴は、ゆっくりと立ち上がり、返事をした。

来てくれない？教室入つたら鬼先生に怒られちやうから。

雪音に詠ねて、雪音に思ひ思ひ足を迷せが

になるようだ。雪音は一つの紙を差し出した。

「これは……。」

「うん？ちゃんと見て、放課後来てね。女子マネ検定試験。」

「女子マネ……？」

「あなたは、剣道部女子マネージャー候補です。女子マネは一人しかなければならないから。」

「ええ！？なんで私が剣道部のマネージャーなんか……。」「私に目をつけられたからだよ。」

そのあたりから次々に生徒たちがボソボソと話し始めた。雪村とかいう言葉がところどころ聞こえる。千鶴は困惑した。

「どうしてですか！？私にだつて選ぶ権利はあるはずです！」「千鶴は嘘をついた。本当は剣道部のことを気にかけている。平助もいるし……、あの斎藤先輩もいる。そして何より……。「だから、あの入学式から決まってたって。あなたは私たちと仲良くなるのが一番いい。」

意味深な言葉にしか聞こえなかつた。

「おい。お前、言つるとちやうやんけ！雪村さん、嫌がつとるやんけ！！」

「つむれいーあんたは黙つてて！ねえ。千鶴ちゃん……。」「きやーきやー言つ空幸をよそに雪音は窓から少し身を乗り出す。「そこ」の女の子。花川さんと、渡辺さんかな？君たちもマネージャー希望でしょ？放課後来てね。」

振り向くと怯えきっている一人のクラスメイトがお互に手を握り合つてゐる。一人はぶんぶん頭を縦に振るだけ。

「おい。何やつてる。」

「その台詞、何回も聞いたよ……。トシ。」

土方が出席簿で雪音と空幸の頭を叩いた。

「るつせえ！？それにトシなんて呼び方すんな！馬鹿野郎……！」

「そんな暴言生徒に吐くのはどうかと思つよ。ひ・じ・か・た・先生。」

(「この女…………しめてやるッ！」)

土方は拳を震わせている。雪音は相変わらず微笑んだままだが、空幸は違った。

「何すんねん！……土方先生！……俺何もしてないで！雪音がジュースおじつてくれる言つからついてきただけやのに！……」

「ほんとこ来る事態間違つてるつて言つてんだ……馬鹿……お前も雪音に乗せられるんじゃねえ！」

「そんなキレんでえやんけ！……俺ピコアなハートなんやぞ！……傷つくやんけよ！……」

「知るか！……勝手にしどけ！……いつかお前ら早く教室行け！……チヤイム鳴るぞ！……」

空幸はしょんぼりしながら先に去つてこぐ。雪音はもう一度、千鶴に笑んでから。

「じゃ。トシさん。ばーばー。」

「気持ち悪い呼び方すんな！……」

最後まで怒鳴り散らしながら土方は雪音を見送る。土方はバンッと音を立てて、ドアを閉めた。土方はその日一日不機嫌なままだった。・。

長く、短く、その日の授業は過ぎて行った。千鶴はすっと溜息をつ

く。

「なんか、朝、大変だつたみたいだな・・・。千鶴。」

「あ。平助君。」

事の事情を千から聞いた平助は眉間にひつてやつと話しかけてきた。どうやら千鶴は近付くなオーラを出していたそうでそれを気にかけてくれたようだ。

「雪音さんは、悪い人じやないんだけど変わつてるから。まあ、マジでこいつちが部が悪いよ。全く。総司と同類な性質だし、しつこいぐらいいだ。」

「・・・・・愛羽先輩・・・・・。なんで私に・・・・。」

思わず話しかけたあの行動がこんなことになるなんて・・・・・。

「うーん・・・・。俺にもわかんない。雪音さんつて昔から意味わかない行動ばつか。」

平助は頭を?きながら苦笑する。

「とにかく。千鶴ちゃんがはつきりするしかないわね。やるか、やらないか。」

千はまつとうな意見を言ひ。その通りだと想ひ。千鶴もはつきりしたい。

「うん・・・・・。大丈夫。私はちゃんとできるよ。平助君。今から行くよね?」

「ん・・・まあ。授業終わつたしね・・・・。」

「一緒に行こう?じゃあ。お千ちゃん。また明日!」

「うん。いつてらっしゃーーー!」

千の見送りを受け、二人は剣道部の道場へ向かつた。

薄桜学園はスポーツに力を入れてゐる。かなりの専用の体育館や道具なども揃つてゐる。高級品な道具も多く、この学校を希望する生

徒が多い理由の一つだ。

体育館すぐ横にある、大きい道場は剣道部のためのもの・・・。

噂ではいい成績を残しているのだが、部員数が少ないらしい。

「うわ・・・・・。なんであんな人・・・。」

「今日は、いつせいに希望者を選抜するって言つてたぜ。それに千鶴も参加するんだろ?」

「う、うん・・・・・。そうだよね・・・・。」

近付いてみていくと、同じクラスの雪音に言っていた女子もいる。そのほかにも結構な女子の数がいる。理由は少し考えればわかった。道場の入り口でたかっているものだから平助も中々入れない。

「ちょっと・・・・・。通してくれよ!」

「無駄無駄。あなたの背じや無理。」

「あんだと!-?」

平助の勘に触れ、平助は勢いよく振り返るがそれ以上何も言えなくなつた。

雪音が竹刀を片手に立つていたからだ。

「ゆ、雪音さん・・・。」

「平助。あなたは試衛館に通つてたし、私も知つてるから早めに入れて稽古もさせてたけど正式じゃないのよ。」

「はあ!-?どういうことだよ!-?」

「この剣道部は強い人しか要らない。ていうか入つても必ずやめます。マネージャーもそう。だから私が検定します。」

ざわざわがやまない。皆不安そうな表情で雪音を見ている。

「検定つて・・・・どうやらだよ?」

平助が聞くと、雪音はすぐ答えた。

「私と一本勝負する。」

「- - - ?」

雪音は凜々しく笑んでいたが、皆信じられず、固まつたままだった。

自由（後書き）

実はこれは転生。けど記憶はありません。
さあさあ。進行遅いですがどんなことになるのか・・。

純潔（前書き）

第七話。

変わらぬ。

雪音は道場の中心で制服のまま立っている。

「胴着は要らないよね。まあ、素人は重いからまず無理だ。私にどこにでも一本入れたら入部していいよ。私は何もしないから安心して。それと、今そんなにしてまで入りたくないっていう人は帰つていいよ。」

ざわめきがやまず、皆話し合つてゐるようだつた。やがてまた一人、また一人と道場を去つてく。あつといつ間に最初の半分になつてしまつた。

「ん。まあまあ、残つてるね。さあ。始めよつか。君からね。」

雪音が適当に男子を指差して道場に上がらせる。千鶴はびきびきしながら列に続いた。

「どうしようつ・・・。平助君。私、剣道とか全然やつたことないよ・・・。」

「まあ。女子はほとんどそうだよ。俺みたいに通つてるとか、クラブに入らないと無理だし。まあなんとかなるつて。雪音さんは本気なんて絶対出さないし、身のこなしがうまいから大丈夫。」

平助の励ましで少しは安心するが、一つ疑問が残つた。どうして自分はまだここにいるのだろうか。さつき雪音は言つた。別に帰つてもいいと・・・。自分はやりたいと思つてきたわけではないのに・・・。

「ねえねえ。斎藤君。何が始まるのさー。」

「・・・総司か。」

「わかつてゐるくせにー。」

姿は見えていははずだ。部室で着替えていたときに沖田は斎藤に話しかけた。体育館裏手から入れる、道場とつながっている広い部室は部員が着替えるのに使う。

沖田は入り口に人がたかつているのを見て、沖田は知つてそうな斎藤に聞いた。

「今日は・・・部員を選抜するそうだ。雪音さんが一本勝負して勝つたら入れる・・そうだ。」

「ははっ。さすが雪音さん。面白いなあ。雪音さんに勝てる新入生なんていないとと思うけど?」

「そんなことはない。俺たちのような優れたものがいるかもしけんだろう。」

「まあ・・・ね。」

ロッカーを閉めて斎藤と部室から出る。道場に入ると、雪音と新入生が対峙している。沖田と斎藤はそれをじっくりと見る。男子だったが剣に迷いがあった。きっと雪音の仕返しが怖いとか余計な事を考へているのだろう。

「おい!何サボッてんだ!いつも通り素振りしやがれ!」

「あ。土方先生。いたんですか。」

土方は拳を震わせながら沖田のすぐ横にいた。斎藤は慌てながら。

「も、申し訳ありません!土方先生。今すぐ始めます!」

と言つて素振りをすぐ始める。沖田はその姿に少し呆れる。斎藤の土方への心酔の仕方は異常な気がする。

「そんな怒らないでくださいよ。今からしますから。」

「うるせえ!俺は今日機嫌が悪いんだ!」

「だから・・・・ん?」

沖田が見た視線の先には千鶴が竹刀を持つて立っている様だつた。

「つたぐ。雪音の奴・・・。雪村にまで無理やりさせやがつて。あいつ何考へてるんだ。」

沖田は土方の言葉を聞いていたが、千鶴に釘づけになつた。震える指で竹刀を持つている様は美しいと思つた。

「ふーん・・・・・。」

「ああ?」

沖田がいきなり言い出すので土方は沖田を睨んだ。

「君はやつぱり、僕を追い回すんだね・・・・・。」

「?」

沖田の意味深な言葉は全く意味がわからなかつた。

「あ。千鶴ちゃん。いつでもいいよ。はい。どうぞ。」

雪音は笑顔のまま千鶴に言つてくれたが千鶴はそれが嘘のような気がする。雪音は勝負の時は人を威嚇するような目をするのだ。それはいわば新入生にとって不良とかかわつたといつ汚点になる。薄桜学園はガラがいいとか、頭がいいとか、スポーツができるなどで有名なのに自分はどんどん汚れていくのではないかと・・・・。

千鶴は決して雪音が悪いとかそういうことを思つていてはなくて、ただ不安なのだ。

彼女に勝てるかと・・・・・。

「どうしたの?」

「えつ!?

千鶴がためらつてゐるのを見て、雪音は首をかしげる。その表情はもう勝つていてと言つてゐるかのような・・・・。

それでも千鶴は何故か鬭いたかつた。自分の瞳に何かが映つた。ぼ

やけてわからないけれど夢の中にいるよつたな……。

千鶴は何も言わず、雪音に詰め寄った。竹刀を思い切り雪音の肩に向かつて、振る。

するとバンッといづ钝い音がして、時間が止まつたかと思つほどになると静けさが訪れた。

「雪音！？」

一番初めに叫んだのは、土方だつた。雪音は倒れ込むこともなく立ち続けている。

しかし、雪音は千鶴を睨んでいるのだ。いつもの穏やかな瞳ではない。

「愛・・羽せん・・ぱい・・・・。」

千鶴は泣きそうな顔をして雪音を見たが、伝わるわけもなく。

雪音は荒い息を繰り返して、肩を掴んでいる。けれどいきなり笑い出した。

「あははは。千鶴ちゃん。すごいなー。胴着もつけない私の肩に本気でうつてくるなんて。」

「「」めんなさい・・・・！」

「いいんだよ。」

雪音は肩を押されたまま千鶴に笑顔を振りまくが、痛みで朦朧としていることがわかつた。

「おい。雪音！」

土方が雪音の腕を掴むが、雪音はそれを無視し、千鶴を見たまま。

「あなたは本当に鬪いたいんだね。」

「・・・・？」

千鶴にはその意味がわからない。不意に目線を変えると、斎藤と沖田がこちらを信じられないと言つ顔で見てている。

改めて自分は何をしたか思い知られた。

「トシ。離して。まだ平助いるじゃない・・・。」

「馬鹿野郎！平助はお前と試合しなくても剣道部部員だ！どうせお

前は入れるつもりだつただろうが！」

「あはは・・・。そうだね。平助は真つ直ぐつていうか・・・。意志があるからいき・・・。私が選ぶ基準は気持ちがあるかどうか・・・。ここで生きていいくつていう気持ち・・・。千鶴ちゃん以外の女子にはそれがなかつた・・・。剣道を少しづつても不安に負けてる・・・。全く経験がなくて・・・。ただ総司や一君のファンなだけ・・・。千鶴ちゃんは、私にぶつけてきた。千鶴ちゃん自身わからないものを・・・。」

「・・雪村・・・。」

土方がこちらを見据えて、千鶴を呼ぶ。

「は、はい・・・。」

「お前は今日から、剣道部マネージャーだ。雪音に極我させたんだ。入るな!？」

「は、はい・・・。」

土方が焦つているように見えて、そう答えるしかなかつた。

「保健室行くぞ。山南さんが見てくれるし、山崎もいる。」

「いこよ～そんな面倒くさい。」

「うぬせえ! お前はそればつかじやねえか!・・・」

と半ば無理やり土方は雪音を連れ去つた。

事の顛末を黙つてみていた平助は千鶴に近付いてきた。

「どうしたんだ・・・。千鶴。マジですか? 僕なんかどんなんがあつても雪音さんから一本なんて取れなかつたのに・・・。」

「や、そうなの・・・?」

「雪音さんは女の子相手だから手加減してただけだよ。」

沖田がいつの間にかこちらに歩いてきていて、彼は歩きながら言つた。

「それでも、雪音さんなら守る」とぐらりとできただろ?」

「守ることはできただろうけど、わざとしなかつたんだよ。」

「なんで? 打ち所悪かつたらやばいのに・・・。」

「別にそれは気にしてなかつたんじゃないかな。ただ彼女の剣を受け止めたかった・・・。」

沖田が切なそうな顔をしているので千鶴の胸には罪悪感だけが残つた。

「どうしたの？君は何も悪い事していないじゃない。」

「え・・・？」

「どうして泣いてるのか聞いてるんだよ。」

優しい彼の言葉が心に染み渡るように脳内を浸食する。自分が泣いていること自体気付かない。

「総司の言う通りだ。雪音さんが言つた通りにあんたは打ち込んだ。試合は相手がどうなるか自分勝てばいい。あんたは勝つただけのことだ。」

斎藤は真顔で言つてくれた。

「そうだぜ！千鶴。元気出せ！大丈夫だつてー雪音さんは何もないよ。仕返しどと絶対してくる人じやないし。」

「あ、ありがとうございます・・・・・。」

励ましてくれる言葉は嬉しくて。他の部員の人も歓声をあげてくれる。

「あの鬼顧問もいないし・・・。雪音さんもいないから解散でいいよね。」

「・・・・仕方あるまい。」

斎藤は少し不機嫌だつたがその日の部活動は終わりになつた。

翌日。あまり晴れない気持ちで千鶴は一人で学校へ向かった。

最近薰は風紀委員の仕事があるので中々一緒にに行けない。

(愛羽先輩・・・大丈夫かな。)

「ちつづるちやーん！おはよっ。」

「うわああー！」

前回と同じように後ろから背を叩かれびくつとなつた。振り返る間もなく、雪音は前に現れた。すぐに見たのは雪音の右肩。肉眼では何もないよつに見える。

「あ、愛羽先輩・・・あの・・・。」

「ああ。そういうや、マネージャーに正式に入ってくれるんだよね？」

「は、はい・・・その・・・肩は・・・。」

「ああ。全然。今じゃ痛くもかゆくもないよ。トシは色々・・シップはれだの・・・。山南先生の診断だけでは心配みたいで実家の薬をもらひに帰るーとか言つて・・・。あの薬はマズイから嫌いなんだよねー。」

とケラケラ雪音は笑う。

千鶴はつられて少し笑つた。

「まあ、そこがトシのいいところなんだけど。あつ。千鶴ちゃん。今日からマネージャーお願いね。」

そう言われ、千鶴は嬉しくなつた。自分は必要とされているとわかつたからだ。

「わかりました・・・。具体的に何をすればいいんでしょうか・・・。？」

学校に向かいながら、千鶴は雪音に聞いた。

「そうだね・・・。別にとくにはないよ。洗濯とか、アドバイスとか、試合の知らせとか、手紙とか・・・。そんなんだね。いわば雑用。

「

マネージャー事態したことないのそんなんもののかと思つ。

「剣道部は血の気の多い奴が多いから。喧嘩ばやいとこもあるから結構大変。ミーハーな子がやめていくのはそれが多いんだよ。千鶴ちゃんは私がいるからからかわれないとと思うけど一人の時は気をつけなよ。」

からかわれるとはどういうことかわからないが気を付けたほうがいいだろ？・・・。

「まあ。まだ私もいるからしんどい時とかはちゃんと声こなさいよ。休みたいときとかは早く帰つていいかから。」

雪音は優しく接してくれる。千鶴は心底安心した。

「じゃあ。私は少しだけ道場行つてくるから先に行くな！」
と雪音は駆けて行つてしまつ。
とセレヒ。

「おはよう。

「！？」

横にポケットに手をつつこみながら歩いている背の高い男。甘いマスクで学校一のモテ男。沖田総司が歩いていた。
(ななななんで・・・・・?)

自分の隣に・・・。

「ねえ。挨拶したんだけど。クラブの先輩に挨拶するのは当たり前でしょ？」

「わわわ！－す、すみません！お、おはようござこます！－！」

千鶴は今更ながら自分が上がり症だと思つた。

「うん。よろしい。早く行かないと遅刻するよ。はーい。ダッシュ！」

犬のように扱われ、千鶴は走るしかなかつた。

その時、気づいた。心のモヤモヤやムカムカは消え去つていたこと
に・・・。

鈴蘭（前書き）

第八話。

恋の予感。

五月に入つて二日目。千鶴は、HRが終わつて、剣道部の道場に向かつて歩いていた。

「千鶴。」

「あ。薰。」

後ろから声を掛けられて千鶴は振り返る。

「今日。母さんも父さんもいないから夕飯はどうする?」

「うーん・・・。そうだね・・・。何か作ろうつか? 今日、ミーティングだけだから。」

来週からテストがあるのでクラブ活動はしないのだと囁く。

「わかった。何を作る?」

「うーん・・・。カレーとか?」

「じゃあ。食材買って帰るよ。お前も早く帰つてくるんだよ。」

薰は微笑みながら踵を返した。

(なんかお腹すいたなあ。)

マネージャーに入つてから、千鶴は平和な日々を送つていた。最初の頃の何かモヤモヤはないし、先輩たちとの付き合いもまあまあできている。確かに雪音の言った通り、剣道部の雑用は結構キツいがそれなりにこなしている。同学年は平助しかいないし何の問題もない。

「千鶴ーー!!」

「あ。平助君、何処に行つてたの?」

平助がはあはあと息をついでこちらに走ってきた。彼は先に道場に行つたと思っていたのだが、千に聞けば違うようだった。

「・・・・・しんぱつあんのところだよ。たくよ・・・・・保健の授業とか暇だから寝てたら呼び出しだよ。しかもこんな宿題押し付けられてさ・・・・・。」

平助が持っているものはテキストドリル五冊だった。五教科ちょうどだ。

「しんぱつあんも左之さんも、俺が通つてた道場の先輩だつたらから・・・・・先生つて感じじゃなくてなんか嫌だ。」

平助が通つていた道場。そこにはあの土方も、雪音も、沖田も、斎藤もいたらしい。かなりのメンバーがそろつている。

その道場のことは平助とずっと一緒にいたが聞いたことはない。

「ねえ。その道場つて何処なの?先生は?」

「ん・・・・・試衛館道場つていう今は潰れてないとこりだよ。先生は近藤勇つて人。」

「近藤・・・・勇・・・・。その人つてもしかして・・・?」

「そう。この学園の校長だよ。」

千鶴は驚いた。そんなつながりがあつたのか。

「土方さんは昔から器用だつたから近藤さんが教師になると時になつたんだって。ちょうど、この学園の枠が空いてすぐ入れたみたい。俺が中一の時に道場はなくなつたからね。やめるからつてこともあつたけど貧乏だつたから。」

「そりなんだ・・・・・。」

「総司も一君もそれぞれ一人を信用してゐるんだ。だからこの学園選んだんだと思う。特に総司は学校とかどうでもいいとか思つてるタイプだし。」

沖田の顔を思い浮かべる。確かに千鶴の中の沖田はびつでもよむやうな顔をしている。

「やべ。もう始まつてるかな?土方も雪音さんも怒ると怖いから・・・・・。」

道場へ向かつて歩いていたがかなり遅くなつてしまつた。千鶴もあわてて入口へ向かつた。

「はーい。遅刻ー！罰ゲームは何をしようかなー。」

雪音が一人を指差しながら言つてくる

そんなにないもんじゃねえよ。

「何？その不機嫌な顔は。」

「わかつてゐるだらうが！！俺の貴重な休みをお前が奪うんだからな

۷

「そんな大きさな・・・えー、やで、皆さん、わかつてないと
思いますが、今年のGWに山へ行きまーす。」

卷之三

声を出したのは千鶴と平助だけだった。

まあ一年生の方たちにはわからないと思いますが、毎年GWを全部使って飛影山の妙蓮寺に行きます。泊まり込みだ

七

平助が叫んだが雪音は笑顔で返す。

「永倉先生にもらつたテキストやりや大丈夫よ。各自日頃勉強して

いるだろ？」「

平助が不意に斎藤を見ると、当たり前と言つて頷いていた。

「今年は二日間だけ。明日からです。準備お願いしますね。明日。六時半にここに集合です。じゃ。解散。」

「やつぱり・・・あの合宿するんだね・・・。」「

「何も問題はないだろ？平助にはいい薬だ。」

沖田と斎藤はわめく平助を見ながらこそぞ話していた。

「そうかもだけど。ねえ。一君は行くの？」

「当たり前だ。剣道部のことだぞ。俺は中々好きだがな。」

「あはは・・・変わってるね・・・。」

沖田は苦笑して千鶴を見た。千鶴も不安がっている表情だ。

「土方先生・・・あの。大丈夫ですか？」

「ああ？」

土方は不機嫌が頂点に来ているようだが、一様顧問に合宿のことを聞いておこうと千鶴は思った。

「『めんね。千鶴ちゃん。私が言に出したことだから。トシは休みが一日しかないから怒つてるのよ。』

「一日もねえよ。俺はお前と違つて忙しいんだ。」

「そんな怒らないでよ。」

雪音は笑いつぱなしだが困つていてるように見える。土方は黙つて道場から立ち去つた。

「雪音さん！俺全然聞いてねえよ！」

「言つてないから当たり前じゃない。安心してよ。平助だけじゃあなぐ、永倉先生や原田先生も呼ぶから。あんただち仲良かつたもんね。」

平助はむつとしながらも嬉しそうで安心した表情を見せる。

「さあ。私も帰ろうかなー。じゃあね。」

雪音は手を振りながら道場を出て行つた。

「斎藤先輩。合宿つてどんな感じなんですか？」

何故か平助と斎藤と千鶴は帰つていた。沖田はいない。斎藤は千鶴の目を見ながら。

「行けば・・・わかる。」

「そんなん。もつたといふらないでください。」

「・・・ふつ。」

斎藤が笑みを漏らす。その表情は芸能人並、いやそれ以上にかつこよくて千鶴はドキリとした。

「でも雪音さんが言い出したことなら絶対よくなないことだよ。しかも三日か・・・。」

「二日目はたいしたことない。朝すぐ降りて帰るからな。」

「でもさー。せつかくのGWだぜ？遊びに行きたいぜー。」

平助が駄々をこねる。千鶴もそう思った。GWにはどこに行こうかと家族で楽しい会話をしていたのに・・・。

「どうせこんでいるから人里離れたところの方が新鮮な空気を吸え

る。それでいいではないか？」

斎藤の言つこにも一理ある。田舎の方が空気が澄んでいて気持ちがいい。この都會じゃなく、田舎に久しぶりに行つてみたい。

「なあ。千鶴。来週、テストじゃん？ちょっとでいいから今から勉強教えてよ。」

「いいよ。あ。夜ご飯カレーなんです。平助君食べる？斎藤先輩もどうですか？都合がよければ家に来ます？」

斎藤は黙り込んだ。千鶴と平助を交互見ながら言葉を振り絞る。

「・・・男を簡単に家に入れるのはどうかと思つが・・？」

「な、何言つてるんですか！薰もいますつて！無理に言つてるわけではないのでいいならいいですよ！？」

千鶴は少し怒り気味に言つた。

「ち、千鶴・・・。やつぱ合宿終わつてから・・・。でも・・・。」

「いや。ここは厚意に甘えて夕飯を御馳走してもらおう。」

斎藤は少し恥ずかしそうに見える。平助の言葉を遮るし、こんなに図々しいことを言つのだ。平助は何かおかしいと思った。

「そうですか。なら私の家、来てくださいね。」

「じ」機嫌な千鶴はルンルンと歩き出した。

「ただいま。 薫ー？ 帰つてるー？」

玄関で千鶴が声を上げると、ダンダンとフローリングの上を歩いている音が聞こえ、こちらに薰が現れる。半ズボンとTシャツだけという普段と全く同じ格好で薰は現れる。

「千鶴・・・なんで藤堂と斎藤が家にいるの？」

「もうっ！ 斎藤先輩でしょ！？ 薫、失礼だよ！」

千鶴が怒ると益々薰は不機嫌になる。

「ふん。 で。 何の用なの？」

「俺は・・・千鶴に勉強を・・・」

「ふつ。 「冗談言わないでよ。 藤堂。 お前が千鶴に勉強を教えてもらつても意味なんてないだろ？」

「う、 うるせえ！ 意味あるよ！」

「俺は、 カレーを食しにきた。」

平助をまた遮り、斎藤が静かに言い出す。 薫はバツの悪い顔をして、玄関から姿を消した。

「す、すみません・・・。 平助君。 斎藤先輩。」

「千鶴が謝ることねえよ・・・。」

「薰がああいう人間ということは入学当初からわかっている。 あんたは別に悪くないだろう。」

平助と斎藤が優しいので千鶴は笑える。

「・・・では。 どうぞ。 あがってください。」

千鶴は一人を上がらせ、カレーを作り始めた。

「千鶴。お前危機感つて言葉知つてる?」

台所でせつせと具をきざみ、炒めてるといふに薰は後ろから囁くようになつてくる。「一人には違う密間でいてもらつことにした。待つている間、斎藤が平助の勉強を見てやることになつたらしい。どうやら斎藤は頭がいいので平助に教えるどころか一人で教えてもらうことになりそうだ。

「何? 薫。やつぱり怒つてる?」

千鶴はクスクス笑いながら答えたが薰はむすつと黙る。千鶴の腰に手を回し、後ろから抱きしめる。

「どうしたの? 薫?」

薰が少しおかしいので千鶴は聞くが薰は中々答えない。

「……今日は一人でゆつくりできると思つたのに……。」
やつと言つたことはまるで子供のようで。千鶴はまたクスクス笑う。
「……『ごめん。夜には一緒にゲームしよう?』

「……千鶴は可愛いんだから、男連れてきちゃ駄目だよ……。」

「男つて……。薰。平助君は幼馴染で、斎藤先輩はクラブの先輩だよ? 何も問題ないつて。」

「わかつてないんだから……。」

薰は千鶴の鈍感差に呆れ、溜息をつくのだった。

その夜、おいしくできたカレーで好評であったが、薰の早く帰れ視線は強烈だった。

壯麗（前書き）

第九話。

真心の愛。

「ま、まだなんですか・・・。斎藤先輩」。

「だ、大丈夫か？千鶴。」

薰の反対を押し切つてなんとかやつてきた合宿。しかし、思った以上に山は高く、一時間は登つているのにまだまだつかない。体力のある剣道部員たちはあつという間に先に行つてしまつたのだが、斎藤だけは千鶴と一緒にペースで登つてくれている。

斎藤は手を差し伸べてくれて、千鶴は手汗がひどいながらもその手を思わずとつてしまつ。手を取ると安心してよろけてしまった。

「危ないっ！」

落ちそうになつたのを斎藤が腕をひっぱり支えてくれた。結果、千鶴は斎藤に抱きしめられる体制になつてしまつた。
目の前に、斎藤の綺麗な顔がある。

（うわー。男の人なのに肌すごい綺麗だな・・・。）

呑気に考えていたが状況をよくよく考えれば可笑しいことだ。斎藤は真つ赤な顔をして千鶴を見つめている。

「千鶴・・・。」

「斎藤先輩・・・そいつえば私を名前で呼んでくれますよね？」

「い、いけなかつたか・・・？」

「いえ・・・でもどうしてかなあって。」

久しぶりに体を動かしんどくなつたせいいか恥ずかしいようなことを平気で聞ける自分が変に思つた。けれど気になつていたのは事実だ。彼はどうして自分によく話してくれるのだろう。クラブや学校の評判を聞けば大人しくて無口で、でも頭がよくてかつこいい。そんな斎藤なのに。

「何故か・・・あんたの名には聞き覚えがあるんだ・・・。昔から知つているような・・・。」

斎藤は目を伏せて言う。

「昔に同じ名前の人いたんですか?」

「いや・・・。いないことは確かだ。」

そう言つと斎藤は立ち上がり、千鶴も立たせた。

「早く行かねば昼飯が食えない。早く行くぞ。」

「う・・・すみません。遅くて・・・。」

「気にするな。あいつらが早すぎるんだ。」

と斎藤は微笑んで励ましてくれるのだった。

「ついたあ～。」

頂上に着いた頃には昼を少し回っていた時間だった。千鶴はもう足が限界でまともに立てない。この山は県内でも結構高い山だ。あまり高い山を登ったことがない千鶴には荷が重すぎる。

「あ。お疲れ様。はい。お茶。なくなつたでしょ？」

雪音が冷たいお茶を差し出してくれた。千鶴はそれをじっくりと飲み干した。

千鶴は初めて生き返るつらうことなのがと理解した。

「一君もお疲れ。はい。どうぞ。」

「・・・どうも。」

雪音が一矢一矢しながらお茶をくれるので斎藤は警戒しながら雪音を睨む。

千鶴はお茶を飲み終えると、立ち上がって頂上から景色を眺めた。街が下に少し見えたが米粒ほどしか見えず、周りは山だらけ。けれど天気もよく空気もおいしくて素晴らしい気分だ。

「すう、・・・。」

「ここから、夕日とか、朝日とか見るとすう、こ感動するよ。」

雪音が嬉しそうに言つてゐる。この頂上の寺に泊まるから見れると嬉しそうに笑ひ。

「そうですね・・・。楽しみです。」

「さてと。匂いはん、今から食べるから、行こうか。」

雪音は寺の方へ誘う。千鶴は自分の空腹を感じ、腹をおかえながら雪音の後をついていった。

「寺の御坊様はこの日のために山を下りて寺丸々貸してくれるんだ。皆はもう広間に行っているからね。」

鎧びれた寺の廊下を歩く。こうじう雰囲気の場所は好きだ。雪音に黙つてついて行つた先は・・・。

「台所・・・ですか？」

「うん。昼は自炊だから。こうじうのはマネージャーの仕事。」雪音は包丁を持って食材を斬り始める。何を作るかは知らない。しかし県内でも有名な不良の雪音がこんなに家庭的なのは知らなかつた。

千鶴から見れば雪音は完璧だと思つ。成績は学校一だし、スポーツもできる。生徒たちからは煙たがられたりしているけれど・・・。雪音は慣れた手つきでたんたんとこなしていく。まるで料理の先生のように・・・。

「愛羽先輩・・・料理得意なんですか？」

「うん・・・ああ。得意って言つか、今もずっとやらされているし、独り暮らしが長かつたんだよ。両親がいなかつたからね。」

千鶴は言葉が見つかなくて黙り込んだ。

「味噌汁は完了。お米はあいつらにやらせといったからいいよ。あと漬物が・・・」魚は一回分だけ御坊様がくれたから鯖焼きましょ。」

と千鶴は何もせずとも雪音が全てこなしてしまつた。

千鶴は雪音を尊敬し憧れるとともに自分が何もできなくて少し落ち込んだ。

雪音が作った完璧な料理を食べ終えると、雪音が突如立ち上がる。

「よし！じゃあ勉強の時間！永倉先生！原田先生！トシ！よろしくお願いします。」

雪音がそう言いつと、全員嫌そうな顔をして、特に教師陣が。

「えー。雪音ちゃんよ。マジで勉強？剣道部で集まつてんのにさあ。GWだつてのにまた仕事？」

「お前はいいじゃねえか。新八。お前は体育科だしよ。俺なんか社会教えなきゃなんねえし。」

原田が新八に対してもうとした嫌味を言いつ。

「おい。雪音。お前調子乗るんじゃねえぞ。俺をどれだけ働かす気だ。この野郎。」

土方は完全にキレているようで雪音に怒鳴る。

「先生たちはわかつてて来たんでしょうが。総司と一緒に剣道部員は万年べべに近い。それを改善するためにも清らかな落ち着ける場所で勉強が必要・・・だと思わない？仮にも教師なら生徒がこんなにいるんだからテスト前の対策ぐらいしてもいいんじゃないの？」

雪音がきつく正論を言いつと、土方たちは何も言えず、しかも沖田が

同意した。

「去年だつて皆で勉強したしいいじゃないですか？雪音さんは皆に赤点とらせたくないって思つてくれてるんですよ。ねえ？」

「そうよ。この合宿は自立心の芽生え。当たり前のことを堕落してきたあんたたちを矯正するいい機会だと思つてね。まあ。私が卒業したらなくなると思うけどわー。」

雪音は一瞬笑んでそれを消すと、勉強開始のための準備を始めたのだった。

「はーい。終わり。十五分後。隣の広間で集合。いつも通りの稽古始めるからー。」

と雪音は広間から姿を消す。

「ふう。終わつたぜー。」

平助は寝ころびながらもう寝る勢いでふにやつと笑う。千鶴も正直、こんなに真剣になつた勉強は久しぶりだつた。

「土方さんよお。あの子はなんとかならねえのか?あなたの嫁さんだろ?」

「嫁じやねえ!結婚してねえんだから!!」

新八が言つと土方は怒り出す。千鶴は前々から疑問に思つていたこ

とを思い切つて聞いてみることにした。

「あの・・・。愛羽先輩と土方先生って・・・。」

「ああ。千鶴は知らねえんだったな。土方さんは雪音と同棲してんだよ。」

原田が土方の顔をにやにや見ながら言った。

「ええ！？？」

「同棲じゃねえ！？」

と土方は言つが、実際のところ土方も保護者としてではなく一人の男として雪音が好きなので本氣で否定はできない。

千鶴は衝撃を受けた。けれどこれで雪音が土方を呼び捨てにしていたのも、土方が雪音が怪我したときに一番初めに駆け寄つたかもわかる。

「そんな照れなくとも知つてますよ。土方さんが犯罪を犯してることにはね。この口リコン。」

「てめえ！総司！ロリコンじゃねえよーふざけんな！」

「ふざけてません。全部本当のことじゃないですか。」

二人は喧嘩し合う。喧嘩するほど仲がいいとはこのことだろうか。

「さ、斎藤先輩・・・。どうかしましたか？」

斎藤がじっと黙っているのを見て、千鶴は思わず声をかける。

「いや・・・。俺は、この合宿はいいと思うのだ。これは雪音さんが言い出したことだ。一見、雪音さんのやりたい放題のものかもしかれんが雪音さんは寂しがり屋な人だ。思い出を作りたいのもあるだろうし、俺たちの勉強のことも・・・自分なりに考えててくれていると思う。」

「そうだな・・・。一君の言う通りかも。雪音さんって変わってるけど悪い人じゃないし、面倒だけ付き合つてあげよ。なあ。土方さん。」

平助が言つと、皆土方を見て。

「わーったよ・・・。」

と土方は立ち上がり広間から消えた。

午後からはひたすら、いつもの稽古。雪音も胴着を着て、二年生の稽古をしていた。

土方は相変わらず厳しくて、皆嫌々そうな顔をしていたが千鶴も雑務に追われ、あつという間に夜がやつてきた。

夕日を見たかったのだがそれどころじゃなくちょっと残念だ。

また夕食を作り、それが終わると、寺の風呂を沸かす。男子が入り終わり寝静まる頃に一人は一緒に入ることにした。

「なんか安心するよ。去年は女子一人だったから。まあいついうかトシはなんだかんだ言つてちゃんとしてるから守ってくれるよ。」

顔を赤らめて言つ彼女はまるで幼子のよう。

「土方先生。頼りになりそうです。まだ会つて間もないんですけど。」「うん・・・・。」

湯船に入るとお湯が溢れたがあつたかくて気持ちがよかつた。

「ふう～生き返るね～。」

「ですね～・・・。」

千鶴もほろよい気分にだんだんなつてく。『んな山奥の風呂も一
い。温泉でなかつたのが残念だが。

「ねえ。千鶴ちゃん・・・。」

「はい?』

「マネージャーに入つて後悔してる?』

その質問に答えるのは結構難しかつたが言葉を振り絞る。

「してませんよ。楽しいです。たしかにしんどかつたりもしますけ
ど・・・。先輩もいい人ばかりだし。』

「そう・・・。私は、千鶴ちゃんに無理をせぐるのかなつて思つて
たんだ。』

「え?』

「私はあなたに田をつけた。あなたが総司に話しかけた女の子だつ
たから。まあ総司はあの顔だし話しかける女の子はいなくもないけ
どそれつていわゆる逆ナンの部類だしそうこうじと言つ子は見れば
わかるけど千鶴ちゃんはそつま見えなかつた。それにあの総司がち
よつとおかしかつた。』

胸が高鳴つて痛い・・・。千鶴は胸を手で押さえた。

「総司はあんまり女の子とか・・・。女の子に本気になつたこと
ないから。付き合つてているのは全部遊びで・・・。総司が夢中にな
ることつてまず少ない。けど千鶴ちゃんは・・・。』

「やめてください!』

「い、ごめん・・・。』

千鶴が声を荒げたので、雪音はそれきり何も言わなかつた。

お願いだから、私の心を彼でいっぱいにしないで。

目がくらんでしまつから。

私が私であるために歩いていくために

彼を思うほど私が壊れてしまうから

私は彼を思わない。

壯麗（後書き）

意味わからん。次回で合宿終わり。特に意味ない合宿かもね。

菖蒲（前書き）

第十話。

お慕いしています。

この合宿の日々はあつという間だった。基本、一時間の勉強と長時間の稽古の積み重ねでほかには特に何もしなかった。

千鶴はマネージャーなので色々食事を作らねばならなかつたが、料理は得意だつたし雪音が手伝つてくれたので何の問題もなかつた。問題があるとすれば千鶴の心の問題だ。

雪音に言われた事がまだ心残りだ。心残りというかひつかつて取れない。

稽古中、無意識に自分が彼の事を見ていることに千鶴は気がついていた。

でも好きとかそういう感情があるとも思えなかつた。

ただあの剣筋に見覚えがあるのだ。剣道も経験ない自分が…。

「どうかしたか？千鶴。」

「さ、斎藤先輩…。」

斎藤に呼ばれ、千鶴は涎を拭つた。いつの間にやら寝ていて後で土方に怒鳴られるなあ…と思いつ落ち込む。幸い、斎藤は千鶴が寝ていたことに気付いていない。

「もう夕方だ。雪音さんの手伝いをしなくていいのか？」

「あっ！そうでした…！」

千鶴は勢いよく立ち上がり斎藤の隣を通り抜けた。一瞬、千鶴が振り返ると、斎藤が微笑んでいた。

それが満足そうに見えて、千鶴にはよくわからなかつた。

「す、すみません…。愛羽先輩。もうできあがりました…？」

「ああ。千鶴ちゃん。うん。もつできたからいいよ。」

雪音は微笑して、両手に漬物の乗った皿を持ち、それを「ちりこよ」にす。

「はい。持つていてー。あ。明日は朝ごはん食べたらすぐ戻るから。準備してね。朝ごはんは今日用意するからね。」

「はい。わかりました。」

千鶴は頷いて皿を受け取ると、皆の集まる広間に向かった。
机を並べてご飯をつつく生活は嫌いじゃない。今日で終わりと想つ
と寂しく思つぐらいた。

家のほうがいいという方が多いかも知れないが千鶴は全く気にしなかつた。

先輩から、皿を並べていくと皆疲れ切つているようすで居眠りしている人が何人もいる。

土方でさえ少し疲れ切つてぐつたりしているようだった。

やがて雪音が最後に入つてきて、全員が席に着いた。

「はーい。では皆さん頂きましょう。今日、食べれることに感謝して残さずいただくこと。以上、いただきます。」

と雪音が号令をかけるといつせいに皆食べだす。少しビックリして、
千鶴もあわてて食べた。

「相変わらず、お前の作る飯はつまいな。」

土方が雪音の横で小さく笑う。

「ありがと。そんな事ばっかり言つてゐからトーシはもてるんだね~。」

「ふん。」

と土方は鼻で笑つた。

「でも。合宿はきついぜ~。もつ行きたくねえ...。」

「何言つてんの。平助。来年もあるわよ。千鶴ちやんがやるつて言
うならね~。」

「ええ~！？千鶴はどうする？やるの？..」

平助に話をふられ、千鶴は迷うことなく頷いた。

「ほひ。千鶴ちやんはやるから平助も参加ね。大変ね。土方先生は。

「雪音に話をふられても土方は何も言わなかつた。
会話らしい会話もここでは無縁なような気がした。千鶴は明日は休
みという希望を持って風呂に入った。

だがまだまだ寒い。寺はさびれているので今にも潰れそうな屋根が見上げれば見えた。

平和と思いつつ、目を閉じる。疲れているのですぐに眠れそうだ。部員はもう眠っているのか物音さえも聞こえない。たんに耳が悪いからかもしねないが。

声が聞こえる。聞こえる。

私を呼ぶ声が…。

「んっ…。」

目を開けると、胸があつた。色白だけどがつちりした大きな男の胸板が…。大きな手が差し伸べられそれが頬に触れる。

それが気持ちよくて千鶴は笑った。そのまま深い眠りについてしまった。

「全く…。こんなところで寝たら風邪ひいちやうのにさ…。」

沖田は溜息をつきながら彼女を優しく起こしてやつた。横抱きにすると持ち上げる。その時、千鶴が沖田の着物の襟をひっぱつてきた。

「やめてよ…。ヒドイなあ。」

沖田はどうしてこんなことしたのか自分でもわからなかつた。彼女が廊下で寝ていてほつておけばいいものを何故か触れたくなつた。抱きしめたくなつた。好きでもないのに唇が恋しくなつた。

（僕は、素直にはなれない性格なのかな…。）

自分の意志をコントロールできないとはおかしな話だ。

彼女に避けられている気がする…。それは事実だ。彼女は目を合わせてくれない。

でも何故か見られている気がする。太陽のよつな瞳に…。

「雪音さん。いいですか？」

「ん？ 総司？」

雪音に扉を開けるよう促し、雪音が扉を開け、「ひらき見る表情を思い浮かべた。

沖田の予想と全く同じで沖田はクスクス笑みを漏らした。

「どうしたの…アンタ…。なんで千鶴ちゃんが！？」

廊下で寝てたんですよ。ぐつすりとね。風邪ひくと思つて持つてきました。」

差し出された千鶴を雪音は不思議そうに受け取る。

「へ、そ…。でもあんたがこんなことするのは珍しいね。あんたはさっぱりしてるとこあるからこんなことしないと思つてた。」

「本當、雪音さんは失礼ですね…。」

「つ。ごめん。まあ…総司が届けたとか言わないほうがいいね。じゃ、おやすみ。」

「ちょっと待つてください。どういう意味です！？」

「千鶴ちゃん…。ていうか総司、本当に気付いてない？」

雪音に聞かれた意味もわからぬ。だから何も言えなかつた。

「ま。おやすみ。明日は早いから早く寝なさい。」

とびしゃりと扉を閉められた。沖田はじめてその場で立ち去つたのだった。

翌日。

山を降りるのも千鶴には辛い。

「う…。」

「大丈夫か？ 千鶴。」

登るときと同じように斎藤は千鶴の傍にいてくれた。

斎藤の手を思わず求める。ひっぱって欲しい衝動に駆られる。理性でなんとか止めるが体力と酸素が奪われて理性も失われていく。

「斎藤先輩… すみません。本当、迷惑ばかりで…。」

「いや。気にするな。迷惑でもないしな。」

斎藤は冷たいように見えるが本当に優しい。この合宿でそれが一番わかつたかもしれない。

「すみません…。」

千鶴は再度謝った。斎藤は苦笑するばかりだ。

「来週のテストは安心しろ。絶対にいい点が取れる。」

「えつ？」

「合宿で一時間勉強していただろう。あれは先生もいるし集中した環境でできる勉強だ。いつもの家ではなく違う所でしたほうがいい。雪音さんは剣道部員の成績があまりよくない事を気にしていたんだ。

「そうだったんですか…。」

「こんなことがあるのも学生だけだしな… 我慢してくれ。」

「大丈夫ですよ…。我慢もしないです。」

千鶴は薄く笑つた。その時、何かのはずみかで足が階段から滑つてしまつた。その時、後ろから引き寄せられた。目を思わずつむり何が起こつたかわからない。

「大丈夫か…？」

耳元で声がした。振り返ると斎藤の瞳がある。暗いように見えて輝く瞳。千鶴の顔がその瞳にうつると胸が高鳴つた。

「すみません！斎藤先輩！あの…。」

みだらな格好になつてゐるこの状態だ。千鶴は焦つた。

「俺は気にするな。立てるか？」

「は、はい…。」

斎藤はゆっくりと立たせてくれた。千鶴は怖かつたと同時に反省した。

「怪我していないな？」

「は、はい…。」

斎藤は不意に、千鶴の手を握つた。瞬時に顔を赤くした千鶴は叫んだ。

「さ、斎藤先輩！？」

「危ないだろ？。さつきのよつにこけられては困る。」

その手が汗ばんでいないか千鶴は終始気にしていたのだった。

菖蒲（後書き）

スランプです。すみません。

出現（前書き）

第十一話。

あよいかな愛。

週は明けてGWの気分が残っている雪音は窓からぼーっと校庭を眺めていた。

「おい。雪音。」

「空幸…。どうしたの？」

朝一番に空幸に声をかけられ不思議に思つた雪音は空幸の浮かない顔を見て聞く。

「合宿はどうだった？」

「大丈夫だったよ。何の問題もなし。あつという間で楽しかった。あ。これ此間ドライブ行つたときのお土産。食べてね。」
雪音が差し出したのは何処にでも売つていそうなクッキーの詰め合わせだつた。お土産のセンスが全くない雪音であつた。

「あ…ありがとう。」

さうなく空幸は受け取り、すぐに話題に戻つた。

「雪音。知つてるか？」

「え？ 何が？」

「今日、あの俺様生徒会長様が学校に来るんだと。このクラスだ。」

「あ…。そういう名前あつたね。不知火君も可哀そうに…。」

不知火は会長と家のつながりがあつたので嫌々一緒にいらせられていた。それを痛々しく見ていた一人は同時に溜息をつく。

「あそこに車があるぜ。俺たち運が無いのかねえ。三年間あいつと

同じクラスとは…。」

「まあいいじゃん。金髪がクラスに一人いるっていつのまでも。」

「お前はいいかもしないが周りは迷惑だ。」

あつことを何も気にしないで言うのが空幸のいいところだと雪音は思う。クラスで雪音が浮いてるのは昔からだった。中学の時から素行が悪い雪音は皆から白い目で見られるのは当たり前のことがつた。

「会長も私と同じなんだろうか…。」

「ああ？ あいつがお前と同じ？ ないない。… 噂をすれば…。」

振り返ると金髪に紅の瞳。規定の制服ではない白い学ランへを着ている風間千景がいた。背筋伸ばしている彼はどこかの国の王子のようすで目を奪われる。話さなければ完璧だ。

「俺のクラスはここか…？ 相変わらず小汚い場所だな。」

風間の後ろには風間に仕えている天霧と、風間の友達である不知火がめんどくさそうに立っていた。

「Jの私立でそんなこといつちやあ御仕舞だよ。会長。」

雪音は浅くツツ「ミを入れる。風間はいたことも気づかなかつたような目つきで雪音を見た。

「愛羽か… 貴様も学期が変わったといつのに相変わらずだな。」

「会長に言われたくないよ。」

「ふん。俺のいないうちに何も問題はなかつただろうな？ 俺の責任になるのだからな。」

「あんたがそんなこと気にしてんのかい！ それにしてももう三年始まつてんのに一か月も来なかつたつてどうこう事？ 留年しちゃうよ？」

？」

雪音はどうかしてしまつたかのように声を張り上げてしまつた。クラスの皆がひいているのがわかつた。

「ちょっとしたバカנסで世界を回つていた…。留年なんぞせんぞ。俺のテストを見たか？ お前と同じ学年一位だ。」

どうだとこうように風間は高笑いする。どんどん皆が引いてくる。

もともと風間はお金持ちで変わり者なので周囲の人々は関わらないようにしている。

「はいはい。よかつたですねー。私は部活があるので放課後残つて色々頑張ってくださいねー。」

雪音は席につくと風間のほうをいつさい見ず、ボーッとし始めた。風間はその隣に座り、雪音をずっと睨んでいた。

昔から一人には壁がある。その壁は見えないので誰にもわからないのだが空幸にはわかつてしまった。

同じ金髪。同じように頭がよく、同じように顔が整つて、同じように周りから理解されない二人。

二人には共通点が多いのも関わらず仲が良くなかった。

「たくよ。愛羽が不機嫌になる理由もわかる俺つてやばいかもな。なあ雨沢。」

不知火に話を振られ、空幸は知るかと言つぶやき去る。クラス全体が険悪ムードに包まれたのだった。

放課後、こつものよつと千鶴は道場に向かった。

「千鶴ちやん！？」

「あ、愛羽先輩？」

息を切らして一年の廊下を走り去る雪音。周囲はいつかの時のよう

にしーんと静まり返っていた。

「どうした？ 雪音。」

ふと顔を上げると教室からひょいと出でた新八と原田と田代があつた。

「あ。原田先生、永倉先生。」

「もつ今日のクラブ活動できないと思つて…言つて来たの…。」

「はあ？ どういうことだ？」

「会長が学校に来たからよ…。あいつの趣味は知つてんでしょ？」

「げつ！？」

と先生たちが不安げな声を上げる。千鶴にはちんぽんかんぽんで不思議そうに周りを見つめた。

「私らじゃ奴を止められないしね…。千鶴ちゃん。ともかく今日は帰つていいから。」

「えつ…へどうこつことですか？」

「いいよ。千鶴。お前は帰つた方がいい。あとは俺たちでなんとかするからな。」

なだめるよつと原田が言つてくれたが気が落ち着かない。

「じゃ。もうこつことで…」

と兎のよつと雪音は走り去つていぐ。先生たちも雪音の後を追う。その間にをぼーっと見つめ立ちはぐした千鶴だった。

「平助君！」

「千鶴？どうしたんだ？先に道場行くんじゃ……。」

平助は役員の仕事をたまたま頼まれていて残っていたのだ。平助に先ほどのことを話すと平助は知っていたようだ。

「まあ大人しく今日は行かないほうがいいよ。変なことに巻き込まれるかもしねえぜ？」

「そんなこと言つたつて……。」

「ほら。薫と帰ればいいって……。て薫は風紀委員の仕事か。」

早くも斎藤にかわって風紀委員の仕事を全面的に任せられた薫は千鶴よりも帰りが遅かった。

「やっぱり私、道場に行つてくる！」

「あ。おい！千鶴！！」

千鶴は平助を無視し、道場まで走った。

道場の前では例の「じとく」静けさが満ちていて気味が悪いほどだった。今日は入りに行くのも辛いほどだ。けれど千鶴は向かっていった。何を求めてとかそんなものじゃなかった。ただ試練へと向かうようだ。

道場に入った瞬間。

何故か大昔のどこかにいるような感覚がした。

前言（前書き）

第十一話。

無限の悲しみ

千鶴は燃える赤い瞳と田^だが合つた。

綺麗だけど恐ろしい瞳…。千鶴はその眼から逃れられないと思つた。

「あつちやー…。」

雪音は額を押さえ、田を伏せる。最悪だ。一度道場へ戻つたら突然千鶴が来てしまいこの様だ。

風間は恋愛に關して、惱んでいた。顔が良いので付き合つたりは出来るのだが性格が筋金入りなので長くは続かない。

内心困つた風間は一年生でいい子がいかにクラブを回るのだ。千鶴の良さを知つている雪音は風間のタイプだと見抜いていた。だから会わせてはならないと思つていたのに…。

「あの…。」

千鶴は風間に懸命に話しかけている。そんな事しなくていい…。

「はーい。帰つてねゝ 風間会長!」

雪音は彼の肩を押し、道場から出そつとした。腕をつねると風間は目で雪音に死ねと言つてゐる。

「黙れ。愛羽。俺に触るな。」

「うつさい！あんたこそ帰れ！仕事もしないぼんぼん会長が！…あんたたち！練習しどきなさい！…」

雪音はついにキレ、後からポソリポソリと来た部員に叫んだ。その中には沖田と斎藤がいる。

「どういう状況なの…コレ。」

沖田は横にいる斎藤に訊いた。

「知らぬ。しかし雪音さんがあれほどキレるのは大事のようだな。大人しく彼女の言つ事を聞こひ。」

あの有名な会長の事は沖田たちも知つていたが関心を持つた事は無かつた。

しかし、風間が見てている先は千鶴だ。千鶴は何故、あんな男に目を向けるのだろう。

二人は不思議でたまらなかつた。

「遅かつたか…。不知火てめーちゃんと止めろーもつ持つて帰れ！」

「つるせえよ！原田！天霧もいねえのにアイツ持つて帰れとか無茶言つな！」

「お前等いい加減にしろよ。喧嘩すんな。な。」

「騒がしいね…。」

沖田は思わず溜息をつく。道場の門の前で教師と不良生徒が喧嘩するという様が馬鹿馬鹿しくてならない。

「其処ーつるさいー帰れ！」

雪音は風間を押し、道場から追い出し、扉を閉めた。

「ふうー・・・・。千鶴ちゃん！どうして來たの！？」

千鶴は雪音に怒鳴られ、固まつた。自分はやはりいけない事をしたようだ。

「あ・・・すみません。帰ります。」

「駄目！…帰つたらまだアイツがいるでしょーー！」

肩を思い切り掴まれ、千鶴は眉を思わず顰める。申し訳ない気持ちが溢れた。自分がどうしてここにきてしまつたのか。それは…。

「もういい…あんたら練習ー！」

雪音は怒鳴りながら千鶴から離れていく。ただ千鶴が見ていたのはあの金髪の男が出て行つた門だった。

(あの人の中…。)

あれに見覚えがある。夢に出てきた事がある。怖いけれど優しい瞳
…でも好きじゃなかつた。

帰り道。なんとなく心が晴れない千鶴は平助と帰る事を断つた。何時もは家が隣なので帰るのだが…。

明日は部活が無い。中間考査の一週間前になるからだ。
(帰つて勉強しなきや…。)

中学までは時間があつたので沢山してきた千鶴だったが、最近は部活があるので帰つたら疲れて勉強する気になれないといふのが事実だ。

その時、千鶴は足を止めた。何かが背中にいる…そんな気がしてならなかつたからだ。

辺りは真つ暗…街灯があるだけ…。

千鶴はゆっくり振り返る。するとまた赤い瞳と目が在つた。

「雪村…千鶴だな。」

男はそう尋ねた。低い声でどこかへ誘つかのよつた声色だった。
「は、はい…。」

学校の先輩だし、そこまで警戒する必要はないだろうと思いつつ、返事をした。このまま去つていいくのも失礼だ。
「剣道部にはよく出入りしているのか?」

「はい。マネージャーですから。」

「あの女の下にいるのか。お前も苦労するな。」

と男は千鶴に近付いてきた。千鶴は動けなかつた。彼と中をずっと合わせていた。

彼も千鶴を見ている。どこか不思議な中で。

「千鶴…お前を氣に入つた。俺の妻になれ。」「はあ?」

と即斬り返していた。なんだこいつはと千鶴はぽかーんと口を開けていた。

「気に入ったから妻になれと言ったのだ。」

「意味わかりませんよ！何で妻！？何時の時代ですか！！だいたい名前も聞いて無いし！」

感情があふれ出す。信じられなかつた。この男の発言の意味がわからぬ。

「風間千景だ。覚えておけ。」

と風間は千鶴の腰を掴み、引き寄せると耳元で囁いた。そして何事もなかつたかのように踵を返した。

息が出来ないほど顔が真つ赤だ。

熱でもあるのだ。帰つたら測つてみよう。半ば呑気な事を考えながら再び千鶴は歩き出した。

これからどんな事が待つてゐるか 全く考えずに。

「千鶴。」

「何？ 薫。」

薰が不機嫌そうに制服のネクタイを弄びながら千鶴の部屋に入つて来た。学校へ行く準備をしていたが着替えはすましてあつたので問題は無い。

「家の電話番号教えた？」

「え？ 誰に？」

「男。」

「男！？」

そんな記憶は全くない。家の電話番号、ましてや携帯の連絡先など

男の人に教えた事などない。

「電話がかかってきたんだよ。千鶴はいるかつてね。全く……名前聞いたらさあ。千鶴に訊けとか偉そうに言つんだよ。後、自分は千鶴の未来の夫とかあの電話の主……もう一回かけてきたらどうしてくれようか」。

「あはは……薰、黒いよ。」

薰は風間だと気付いていない。でも薰は発言した事はやる人だ。風間も薰の手にかかるてしまえばどうなるかわからない。

それにして何故、風間が自分の家の電話番号を知っているんだ？いやそれ以前に風間のする行動が読めない。今後、何かに巻き込まれたらどうしよう。

朝は平助と薰と千鶴の三人で学校へ向かったので何事も無く無事に学校についた。

平助と別れ、教室に入ると、いつもは各それそれで会話をしているクラスメイトが一斉にこちらを向いた。

その視線は好奇の目と冷たい視線とで構成されていた。

「やつと来たか 我妻よ。遅れるかと思つたぞ。」

と声の先は、千鶴が何時も座る席からした。静まり返った教室で輝く金髪をなびかせた風間が不敵に笑んでいる。

「な……」

声が出ないほど千鶴は驚き、口をぱくぱくさせてばかりだ。風間は立ち上がり千鶴の傍までやつてきてニヤリと笑んだ。頬に手が添えられたその時――。

「なーにやつてんだ。風間……」

出席簿を今にも投げつけそうな剣幕の土方が現れた。風間の手が離れ、千鶴は解放された。

「我妻に会いに来ただけだ。貴様は何時も俺の邪魔をするな……嫉妬でもしているのか？」

「ああ？ 何訳わかんねえ事言つてんだよ。我妻？ はあ？ 気持ち悪い。」

「

土方は吐き捨てるかのよつに言い、風間を目を細めて睨む。

「もうチャイム鳴るぞ。早く帰れ。風間。いいか？もしさたこの教室に来たらでめえ俺の補習授業受けて貰うからな。総司ど。」

それを聞くと風間はバツの悪い顔をした後泣々帰つて行つた。千鶴はその間何度も土方に礼を言つた。

「あの…土方先生…。」

「雪村。アイシの事は雪音に言へ。俺じゅどひしおひもねえ。」

「え…？」

土方は千鶴と田を合わせず、窓の外を睨んでいた。

宣言（後書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。まだ続けるつもりですので気長にみてもらえると嬉しいです。

冷淡（前書き）

第十三回。

「さうでも離れない。」

その日は教室から一歩も出なかつた。昼ご飯を食べる前に手を洗いに行つたくらいだ。

理由はあの風間千景に会うかもしれないから。

生理的に無理とかそんなんじゃないのだが、あんな風にこられではたまつたもんじゃない。

御蔭で、授業中まで千鶴と風間の話でもちきりだつた。

クラスメイトの話では、風間はこの学校にかなり投資している会社の息子らしい。だから教師も何も言えず、お手上げ状態だと言つ。そう風間はどうしようもない我儘な人間なのだ。

(まあ…意味不明な言動してるもんね…。)

と千鶴は若干酷い文句を垂れていた。あんなに恥ずかしい思いをしたから仕方がないのかもしれないが。

H.R.の時間。何時もより疲れていた千鶴は暫くぼーっとしていたが、何故か土方が何時もよりかつこよく見えてしまい顔を赤くした。今日…風間を追い出してくれたからか、何時もは鬼のように見える土方も神様に見えてきた。

「雪村。しつかりしろ。」

「へ？」

気が付けば土方が千鶴の頭を軽く叩いていた。撫でるの方が近いかもしれない。

「机下げて、掃除に行け。何ぼーつとしてやがんだ。」

「あっ。はい！すみません！！」

千鶴は慌てて机を下げ、簞を取りに行つた。

彼女の背中を土方は細い目をして見ていた。

掃除が終わり、千鶴は部活に向かった。向かつ時でさえ、彼と会うのは不安だった。

「千鶴ちゃん。」

「愛羽先輩…。」

そんな中、優しい彼女は名前を呼んでくれた。そういうえば…土方が雪音に言えと言っていたのを思い出す。

「愛羽先輩…。あの、風間さんの…。」

「あの俺様会長? もしかして、千鶴ちゃんに何かしたの?」

「昨日電話があつて…兄が出たんですけど…今日は教室に居て…。」

千鶴が言い終わる前に、雪音は深いため息をついていた。

「ごめんね…。アイツ、教室に来なかつたから学校に来てないと思つてた…。アイツ案外、行動力あるんだよね。・・・うーん。」

「す、すみません…。」

「何で千鶴ちゃんが謝るの。悪い事無い。大丈夫。私がいる限りはアイツは何も出来ないよ。」

「え? どうしてですか?」

「彼奴は…私のことが嫌いだから。」

「嫌い?」

「似た者同士だからね…同族嫌悪つてやつよ。だから私が言えれば大丈夫なんだよ。でも千鶴ちゃんに本気だつたら聞かないと思うよ。」

「その時は…千鶴ちゃんも考えてあげてよ。」

「ですけど…わたしあの人の事知りませんし…。」

「話すのも鬱陶しいかもしないけど頑張つて。私はね…千鶴ちゃんなら大丈夫だと思うの。風間会長の彼女。風間会長つてさ。変わ

つてゐるから理解されにくくて誤解されがちなんだよ。あんなに態度でかいから陰口叩く奴はいくらでもいるからね。」

千鶴は彼の事がわからなかつたが、なんとなく理解されにくい性格だと思っていた。

だから彼も辛いし、少し人とズレているのだと思ひ。

「金持ちって色々大変だよね。会長は・・・好きでもない相手と結婚させられるかもしないんだって。それって・・・すこく可哀そう。」
「そういつた彼女の目は美しかつたが、儂い瞳だ。

千鶴は深く、考えた。そしてその思いは部活中にも及んだ。

「変だよなあ。千鶴の奴。」

「何が。」

「ぼーっとしてるつーか、生気がない？」

平助は千鶴を見ながら隣にいた原田と永倉に言つた。土方が用事でいないので仲のいい一人が生徒たちを見ていた。それに、平助と同じ道場にも通つていたので平助や斎藤、沖田とも仲が良かつた。歳は離れているが。

「千鶴ちゃんも年頃なんだから色々あんだけよ。わかつてねえなー。」

平助は。

「うるせえよ！しんぱつつあんだけには言われたくねえ！」

「なんだとー！ー！」

と子供のようにいがみ合つ一人を柔らかな表情で原田は見ていた。

「ほんと、馬鹿だね。そう思うでしょ。一君。」

「どうでもいいが。総司。お前、何かあつたか？体調でも悪いのか

？」

調子が悪いと言われて、沖田は苦笑した。斎藤は妙に鋭いところがある。

「何でもないよ。」

そう言いながら千鶴を見てみた。彼女は完全に心ここにあらずだ。そんな彼女を何故自分は見ているのだろう。次に雪音と目が在った。雪音は沖田を突き殺すような目で見ている。常に彼女は剣だ。人を殺すような目で見ている。それは怖い意味ではなく、人の真実を常に見る目。

そんな目を持つている人はそういう人。

沖田は自分の感情全てが彼女にバレているのではないかと思つた。自分でも気づかない心の奥の感情も。

（もう六時か……）

千鶴が帰路についたのは六時だった。薰は生徒会の仕事を家でやるといいすでに家に帰つていた。

お腹がすいた……そう思いながら食べ物屋の前に通るのは少し苦痛だ。

「はあ・・・。」

「溜息をつくとは関心せんな。」

「……！」

ぎょっとして振り向くと風間の満足気な微笑みがあった。かつこよくて言葉も出ない程綺麗な顔をしている。

「今日は、一日中暇で仕方が無かつたぞ。愛羽に会いたくなかった

から部活にも顔を出せなかつたしな。まあ・・・いい。」ついして会えた訳だしな。」

そういうと道の真ん中で彼は千鶴の腰を掴み、引き寄せる。

「あや！」

「可愛い声をする。」

とまた嬉しそうに風間は笑い、引っ張つていく。

「ど、ビビビ何処に・・・？」

「俺の家だ。お前の家にもなるがな。」

「ちょっと！－！困りますよ！離してください－！」

人通りのまだ少ないところでマジだつたと思う。こんな姿、同じ学校の人見られたらどうなるか。

風間はどんどん進んでいく・・・。千鶴は抵抗する事もできなくなっていた・・・。

「なーに、いちゃいちゃしてるの。千鶴ちゃん。」

優しい声だった。この声・・・。

振り返ると物凄い笑顔の沖田総司が其処に居た。

「貴様は…沖田。」

「あはは。こんなところで会つなんて奇遇ですねえ。風間会長。ところで・・・うちのマネージャーに何やつてるんですか？セクハラ？」

「はん。此奴は俺の妻になるのだ。何がセクハラだ。」

「その発言もセクハラですよ。会長。千鶴ちゃんを離してください。見てるこっち、気分悪いんじ。」

風間の力が抜けたので千鶴は振り払い、沖田の後ろに隠れた。しかし彼は千鶴など見向きもしなかった。

「会長。聞いてますよ。雪音さんにこつてりしばかれたって。いい様ですね。」

「貴様…何故…。」

「風間はかつてないほど焦つているような表情だ。」

「雪音さん。何でも話してくれますよ。貴方が十歳までお…。」

「それ以上言つな！！貴様覚えていろ……」「完全敗北の言葉を口にしながら風間はあつとこつ間に消え去つていた。

「あの……沖田先輩。」

「もう暗くなるから気をつけて帰りなよ。」

「はい。あの……。ありがとうございました。」

「あのやあ。」

沖田は振りまいて、思い切りこちらを見んでいた。

「嫌なら嫌つてはつきり言こなよ。わつきも誘拐されそだつたじ

やない。」

「誘拐つて……。」

「僕が何時も助けられる訳じゃないんだから。風間につけられたくないなら彼氏の一人でも作るんだね。ほんと、後ろから見てて気分最悪だつたよ。じやあね。」

散々嫌味を言つてから沖田は行つてしまつた。

千鶴は申し訳ない気持ちと、何とも言えない虚しさが心に痛かつた。（どうして……あの声が沖田先輩に聞こえたのだろう？）

優しい夢に出てくるあの声が沖田と同じだった……それは勘違
いなのだろうか？

冷淡（後書き）

更新遅れだし、あんまり進んでません（^_^;）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2120r/>

Si vis amari, ama

2011年6月12日10時00分発行